

「巻き込まれ親父の困惑」

作 藤次郎政秀

●プロローグ

「はい、碓屋H Gです…はい、M K社長毎度お世話になっております…はい？…ええ、いますけど…はい、はい、…わかりました。明日10時に伺います。はい、失礼します」

「I Y、仕事…いつものご指名…」

「はい、わかりました」

H Gは翌朝I Yを連れて依頼を受けた芸能事務所〇×エージェンシーを訪れた。この芸能事務所のタレントやアイドル達の警護任務はよく請け負うので、今や芸能事務所のあるビルに入館するのも、専用パスが与えられている。

それでも、ここの社長に会うには、例え、先方からの呼び出しでも、秘書を通じる必要があるので、受付から社長秘書の内線にかけて来訪を告げる。

迎えに来た社長秘書に案内されて最上階の社長室に通された。

社長室の手前に秘書の居るフロアがあり、社長秘書は机の上の内線電話の受話器をとり、

「社長、碓屋の方々をお連れしました」と言うと「ああ…通してくれ」と返答があった。

「では、こちらへ…」

と言って、社長秘書が社長室のドアを開けた。

「いやあーH G。待っていたよー」

以前、この芸能事務所所属の人気歌手I Mが全国ツアー中に乗船したフェリーが乗っ取られ、I Mとツアースタッフを救出して以来（「巻き込まれ親父の突入」参照）、この芸能事務所のM K社長からの碓屋に対する信任は厚い。

「この度は、当社碓屋のサービスを御利用いただきまして誠にありがとうございます」

H GとI Yが挨拶する…このセリフが今や定番になっていた。挨拶が済むか済まない内に

「I Y、おひさー」

と言って現れたのは人気歌手I MとマネージャーのU K。I MとI Yは少しかがんで体を互いに反対に傾け、小さく手を振りあつて、再開を喜んでいた。H Gはそれを見ていて「若い女性でもこの挨拶はするんだなあ…なんか、散歩中の犬がいつもルートの途中で馴染みの犬にであつた時の尻尾の振り方に似ているような…」と、以前I Mの乗船したフェリー乗っ取り事件を解決後、白山亭内で打ち上げパーティーをしていた時に、店員のT Tと事件に巻き込まれたH Gの後輩Y Mが再開して、これと同じ仕草をしているのを見てH Gは勝手に「オバハンの挨拶」と言っていたが、修正する必要がある様だと思った。

「なに堅苦しいことを…もう、ウチと御社の仲じゃない！ささ…座って」

M Kに言われるまま、ソファーに座ると、M Kはいつものソファーセットの上座に座り、I MはH Gの正面に足を組んで座った。

秘書がH G達にお茶を出す。M Kは「喫茶店で本格的コーヒーを淹れる人（H Gはエージェント派遣会社碇屋の他に女給喫茶白山亭を経営していて、自らコーヒーを淹れている）にコーヒーは出せないよ！」と言って笑った。それを聞いたI Yは、

「（あれ？最初のI Mの警護任務で来た時に、市販の紙パックのドリップコーヒーが出でて、私が嫌な気分になったのを、誰が話したんだろう…）」と思った。

I Mが目の前に居て、今や彼女の友人となっているI Yに指名がかかったので、I Mの警護依頼と言う事は分かっているが、一応H Gは

「本日、お呼びいただいた要件と言うのは？」

「だからあ…もう堅苦しいんだから…H Gは…、いつものI Mの警護任務よ。今度来皇するD国の国際的な人気アーティストS BのコンサートにI Mがゲスト出演するの。それで、S

Bの要望で、『このコンサートに出演するアーティストは自前で警護をつけてくれ』と言われてね。それでIYちゃんをお願いしたいと思うんだけど」

「…成程、確かSBさんの国では、現在大統領選挙中で、SBは過激な発言が多い野党支持者のため、よく反対勢力から命を狙われていると聞いていますが…」

「そーなの、だから今回のコンサートでも何かあると思うけど…SBさんの来皇コンサートは初めてだし、IMのゲスト出演はSBさんのたつての依頼でもあるしい…IMの株が上がって実入りはいいし…出ないわけには行かないしい…」

HGはMKの『IMの株が上がって実入りはいいし…』の言葉に「(相変わらず儲け優先だなあ…)」と苦笑した。HGはIYに向き直り、

「…だそうだ…いつもの依頼だ。どうする？IY」

「はい、任せてください」

IYがニツコリして返事すると、IMがIYにウィンクして、

「ありがとうーIY。頼むね」

「うん、IM」

HGはMKと契約内容を打ち合わせ、契約書を取り交わし、SBの来皇コンサートのスケジュールとか、IMのスケジュールとかの情報について話をした。

その帰り道。

「IY」

「はい」

「今回はちょっと一波乱ありそうだ」

「…そうですね」

伏し目がちに考えるIYの返事にHGは“親父モード”で聞く

「どう感じている？」

「はい、S Bさんの母国であるD国の大統領選の状況とか、S Bさんが支持している政党と他の政党との関係とか、S Bさんの過去の発言とか…あらかじめ頭に入れておかなければならない情報が多いですね」

「…そうだ。事の次第では、S Bさんが来皇中に暴漢に襲われるリスクも考慮する必要がある」

「はい」

この会話を通して、H GはI Yの成長を頼もしく思った。

●西の国から来た女

白山亭内…

「准尉！S Bさん来皇の中継、始まっていますよ！」

テレビの前に居るH Yの言葉に、H Gもテレビ前に移動する。

『D国から、人気アーティストのS Bさんが、帝都国際空港に降り立ちました…D国大使と皇国文化大臣歓迎の元、我が皇国を代表する人気歌手I Mさんによる花束贈呈が行われます。』

それを見て、H Yが画面を指さして、

「准尉…I Yが…」

「どこだ？」

「I Mの後ろに…」

I Mの後ろでマネージャーU Kと共に、花束を持っているI Yの姿を確認した。

タラップで手を振り、投げキッスをするS B…その後ろに赤毛の体格の良い女性が立っていた。それを見たH Yが

「ずいぶん大きな人ね…SBさんのボディーガードかしら？」

と驚いていると、HGも

「そのようだね」

と、応じた。

タラップを降り、SBはD国大使と握手を交わし、続いて皇国文化大臣と握手を交わす。

続いて、IMがIYから受け取った花束をSBに渡し、互いに握手をして大使・大臣と共に写真に収まる。IYは既にカメラから外れていた。

帝都国際空港…

SBの入国手続きの為に空港のVIPルームが用意されており、大使と大臣が警護のSP達と共に、VIPルームに向かうSBとその関係者一行。それを見ながらIMが「さて…帰るか」とマネージャーのUKとIYに言う。SBの通訳から呼び止められた。

「何か？」

「SB様は、IM様と少しお話をしたいとの事で、一緒にVIPルームに同行して欲しいと言っています」

その言葉にIMは小首を傾げて、

「そう…あたしだけ？マネージャーは？あこの人、あたしのボディーガードなんだけど、同行させていい？」

と言って、IMは後ろに居るIYを親指で指す。SBの通訳はニッコリと笑って、

「はい、構いませんよ」

「じゃ、行こうか」

「はい」

SBの通訳に続いて、IMとマネージャーのUK、IYもVIPルームに入る。入れ違い

にD国大使と文化大臣、警護のSP達がVIPルームを出て行った。

「(D国語で) やあ、IM会いたかったわ」

ソファーに座ったSBが嬉しそうに手を上げて言ったが、D国語なのでIMには理解できなかった。

IYは大学でD国語文学を専攻していたので、ある程度は理解できた(IYは生まれつき左耳が難聴のため、D国語の読み書きは出来ませんが、会話は苦手です。作者注)。

「SB様は、『IMさんに会えてうれしい』と言っています」と通訳が言う。

「SBさん、あたしもだよ。あんたのコンサートに出る事が出来てとても嬉しいよ」

通訳がIMの言葉を訳すと、SBは喜んで、

「(D国語で) わたしもあなたと一緒にステージに立てて光栄よ！」

と言って、通訳が訳す前に笑顔で握手を求めてきた。IMはSBがなんて言っているかまだ理解できていないが、笑顔で握手を求められたので、悪いことは言っていないと直感し、SBの手を握り返す。通訳が、

『わたしもあなたと一緒にステージに立てて光栄よ』と言っています」

目の前で、握手を交わすD国と皇国を代表する二人の歌姫…普通の人なら興奮する…しかしIYは職業柄、SBの後ろに立つ赤毛の大女を見つめていた。彼女はIYの視線に気づき、笑顔になるが、愛想笑いかどうか判断できなかった。

…SBとIMは通訳を通じて話をする。(以下は、通訳を通じての会話ですが、いちいち面倒なので、通訳抜きの会話をお楽しみください)(笑)作者)

SB「この度の皇国でのコンサートは、かなり以前から決まっていたのだけど、コンサート会場の帝都球戯場の都合と、私の都合とがなかなか合わなくて、今日まで来たわ…だから、今度のコンサートが楽しみで…それにね、私あなたとは是非一緒に歌いたかったの!だから、

ここ（皇国）に来るのが楽しみで」

I M「あたしもだよ」

と言って、二人は笑った。

S B「こちら、私のスタッフ…紹介するわ」

S Bがソファアの横に座っている主要スタッフ達を紹介した。I MもマネージャーのU Kを紹介した。そして、

I M「あと…あたしのボディーガード、碓屋のエージェントI Y…あたしの友人」

と言って、I Mの後ろに立つI Yを紹介した。I YがI Mに対して会釈をすると、I Mは、

S B「…ボディーガード？…ボディーガードがあなたの友人？」

ビジネスに徹しているS Bが、I Mが自身のボディーガードのI Yを“友人”と言ったので、訝しがった。

I M「そうだよ、今まで色々トラブルに遭ったけど、彼女が解決してくれたし、オフでも一緒に遊びに出かける仲だし」

S B「トラブル？」

と言って、S Bの方眉が上がる。

I M「流石に、あなたの様に命を狙われる様なよっぽどな事はないけど…ストーカーとか迷惑な人とか…」

と、I Mが言うと、S Bはフツとため息をついて、

S B「そう…ここ（皇国）は平和ね…私の信頼するボディーガードは、先月私の目の前で殺されたわ…」

と言うと、I M達は驚き、

I M「それは、ご愁傷様」

と、S Bを氣遣った。S Bは首を左右に振ると、

S B 「ううん：それで5人目：負傷して仕事ができなくなったり、殺されたりしてね」

と、平然と話すS BにI Mは「(うっわー、この国(皇国)に生まれてよかった)」と思った。

S B 「あつ、そうだ。紹介するわ、私のボディーガードのM P」

と言って、後ろに立っている赤毛の大女を紹介した。

「ワタシ皇国に昔留学してタ：だから皇国語解るネ」

M Pが皇国語で挨拶したので、I M達は驚いた。

「「そーなの」」

● I YとM P

「I M、I Yさん来ましたよ」

とマネージャーのU Kが言うと、リハーサルで借りている海浜アリーナの控室でI MがI Yに対して

「おそーい」

と、文句を言うが、顔は笑っていた。

「ごめーん」

I Yが申し訳なさそうに言うと、I Mは

「あんたの方が、ここ(海浜アリーナは白山亭の近所に在ります)に近いのに：」

「朝から、I Aと組手(こちらの世界で言う、空手のようなもの)の練習してたの」

とI Yが言った。

海浜アリーナの中には、S Bがコンサート同日に使用する舞台セットが再現されており、その強度や構成の最終チェックが行われていると同時に、楽団や出演者のリハーサルが行われている。今は、前座のバンドのリハーサル中で、I Mはゲスト出演と言っても、アドリブで行うわけではないので、舞台演出家の元でS Bの代わりのI Mの芸能事務所の人とリ

ハーサルを行うことになっている。

そこに、突然SBがマネージャーと通訳、ボディガードのMPと入ってきて、IMが座っている折り畳み机を挟んで反対側にパイプ椅子を広げながら話を始めた。(以下再び、通訳抜き会話をお楽しみください(笑)作者)

SB「コンサート前日のチャリティーオークションの準備はできてる？」

IM「うん、もうばっちり」

SB「何だすの？」

SBはIMの出す商品に興味を持っていた。

IM「いつもの、サイン入りの写真集とかCDとか…全国ツアーのスタジアムジャンパー、コンサートスタッフのジャンパーやパーカーとかね」

IMはいつものコンサートツアーで販売している商品を出す予定の旨話をした。

SB「…そうなの、私と同じね…なんかつまんない」

SBが残念そうに言うと、

IM「かぶったか…」

お互い考える事は同じだと苦笑いした。IMは何か他のモノとか無いか考えだした…SBも考えているようで、腕を組んで俯いてブツブツ言っていた。

IMもIMにつられて考える…「白山亭のフィギュア(デザインはIMが白山亭で着た女給服姿「巻き込まれ親父の子守唄」参照)とか…ダメか…」と考えて、独り苦笑した。そしてふと、

IM「…うーん、こんなのはどうかなあ…SBさんとIMがお互いの写真集とCDにサインを書くのは…また皇国コンサート記念とか言って、日付入りの2人がサインしたものもあるというのはどう？」

となにげなくI Yが提案したら、S BとI Mが

S B・I M「それ、良いアイデアね！」

とI Yのアイデアを採用してくれた。S BはI Yに微笑んで

S B「…成程、貴女のいい友人ね」

とS BがI Yを認めてくれた。一方、M PはS Bの後ろに仁王像の様に立っていた。

「こんにちはー、白山亭からの出前でーす」

と言って、白山亭の女給姿のT YとI Aが籐のバスケットを下げてI Mの控室に入ってきた。

「あつ、こつち、こつち…」

I Mが手を上げる。T YとI Aの姿を見たI Yは

「あれ？T Y先輩も？」

I Mが白山亭にコーヒーとサンドウィッチや軽食をオーダーしたので、I Aが出前に来ると思ったが、T Yまで来たので驚いた。

「アハハ（苦笑）、ここ（海浜アリーナ）でI Mさんがリハーサルやっていると言う話で、白山亭内ではその話で持ち切り…誰が出前に行くかで、アルバイト含めて一騒ぎがあつて、最後はジャンケンで決めてきた」

と、T Yが苦笑いして言うと、I Yは微笑んで

「うふふ、そうなんですネ」

と応じた。

S B「こちらの方たちは？」

S BがI Mに聞くと、I MはI YとT Y、I Aと並ぶように言うと、

I M「紹介するわ、私の友人I Yのもう一つの顔、この近くにある白山亭と言う喫茶店の人

達…この人達もボディーガードとかするエージェントよ」

S B 「オー」

S B は感嘆の声をあげる。

I M 「そろそろお昼時だから、彼女のお店に出前頼んじゃった…美味しいからS B さん達も良かったらどうぞ」

T Y と I A がバスケットから、コーヒーポッドや紙コップ、サンドウィッチや軽食のサラダやフライドポテトなどを出すと、

S B 「あら…美味しそう…それに、その制服も可愛いわね」

とS B が喜んだ。

「どうぞ」

と言って、I M がサンドウィッチの箱を渡し、S B が箱を開けてサンドウィッチを口に運ぶと

S B 「美味しいー」

と言つて喜び、またコーヒーを口にすると、

S B 「あら…いい香りとコクだわ…」

と感嘆したので、I M と I Y はハイタッチした。

S B が満足するまで出前を食べてしまったので、I M が追加注文するほどだった。

M P も白山亭の出前を食べていたが、サンドウィッチの入った箱や紙コップのラベルを見て首を捻っていた。

●トラブル発生！

S B の来皇コンサート前日、帝都球戯場の駐車場に設置された即席舞台でチャリティー

オークションが開かれ、IMも参加した。

IMは、サイン入り写真集とかCD、Tシャツ、スタジアムジャンパー等を出品。

SBは、サイン入りCDやプライベートDVDとか、以前のコンサートで使用したギター等を出品した。

そして、IYの提案した皇国コンサート記念としてコンサートの日付入りの2人がサインしたCDやTシャツを出品した。

IYやMPはそれぞれのアーティストの後ろに座り、暴漢が現れてもすぐに対応出来る様に準備していた。

チャリティーオークションのスケジュールは順調に進み、その間の二人の歌やトーク、クイズコーナー等のイベントも終わり、会場は熱狂の内に、オークションが始まった。

「では、皆さま座席の番号札は用意できてますかー！」

「はいはい」

観客席から一斉に番号札が上がる。

「ルールを説明します。司会の私が言う値段を起点に、高い値段を付けてください。値段を言うときは、お手元の番号札を上げて、大きな声で言って下さいね…司会の私が見逃したり、聞き逃すと損しますよー。最後に残った札の方が落札するまでのサドンデス方式です…落札した方は、ステージに上がって、落札額の現金を司会の私に支払い、出展者のアーティストから品物受け取っていただきます。なお、今日のオークションの金額は全額国際支援団体（こちらの世界の赤十字とかユニセフに該当）に寄付されます」

チャリティーオークションが次々と進んで行き、会場は熱気に包まれ、宴もたけなわ…最後にSBが出品した、以前コンサートで使用したギターのオークションが始まる。

次々に札と値段の掛け声上がる。

「はい、73番：△〇万×××皇円：他に居ませんかあー。：他に居ない様ですので、73番さんがSBさんのサイン入りギター。落札決定しましたー！」

会場に歓声上がる。

「それでは、73番の札を持った方、ステージに上がってください：勿論、お金の用意もね！」

73番の札を持った男性がステージに上がる。

落札金額を司会者に払う。

「ハイ！落札金額を頂きましたー」

と言つて、司会者はお金を募金箱に入れた。

「では、SBさん出品のサイン入りギター：SBさんから贈呈されます」

と司会者がアナウンスし、SBの後ろに居る通訳がSBに囁くと、SBは笑顔で席から立ち上がり、出品物を置いてあるステージ中央のギターを持ち、持っていたサインペンでサインを書き、それを持って、司会と落札者の居る場所に歩いて行く。

SBが落札者にギターを渡し、握手を求めた時、落札者の男が着ていたジャケットの中から刃物のようなモノを取り出し、SBに向けて構えた。

それを見て絶叫するSB：司会者が勇敢にもSBとの間に割り込もうとしたが、男は刃物の様なモノを振り回して、司会者をSBから遠ざける。MPが駆けつけ、SBを庇おうと男との間に割り込み拳銃を抜く、同時にIMに危害が咥えられないように、IYも拳銃を抜くも、背後から何者かに拳銃を叩き落され、続いて、MPの構えた拳銃も叩き落される。拳銃を叩き落した犯人は落ちたMPの拳銃を拾い振り向きざまにSBを撃つ。MPの機転でSBを足払いするが、2発撃った1発がSBの足（高く上がってしまった脛脛）に命中してしまう。IYは落とされた自分の拳銃を拾い構えるが、犯人はMPの拳銃を持ったままIYの横をすり抜け逃走：その姿から、犯人は女性と確認した。

会場は騒然となり、ステージ上の他の人達はその場に蹲ったり伏せたりした、客席の観覧者達は、座席（パイプ椅子）の陰に身を隠した。

その後、スタッフと警備員達による避難誘導が行われる中、救急車と警察車両が到着した。重傷者はS B 一人。軽症者は逃げようとして転倒した者数名…刃物のようなモノを持った暴漢の男はその場でM Pに取り押さえられた。

警察からは、暴漢は『銀髪の外国人の女性から頼まれただけ』と証言しているとの事。凶器の刃物は模造刃であった。

このチャリティーオークション自体は、テレビ中継はなかったが、事件が起こると、テレビ番組に速報のニューステロップが表示され、その後のワイドショー番組では、事件後の現場は中継で報道される騒ぎになった。

S Bは帝都国立総合病院に搬送され、その場で銃弾の摘出手術を行い、豪華個室に入院した。

I Y達、S B以外の関係者は所轄の警察署に呼ばれて事情徴収を受けた。

警察から解放され、見舞いに来たM Pに対して、S Bは凄惨な剣幕で

「(D国語で) M Pあんたクビ! 契約もここで打ち切るわ」

「(D国語で) …そんな…」

「(D国語で) …ここから出て行って、顔も見たくない!」

S Bに契約打ち切りを通達され、仕方なくM Pは病室を出て行く。

「(どーしよう)」と、取り敢えずS Bと宿泊している高級ホテルに荷物を取りに帰ると、部屋が荒らされていた…

「オー、何てこと！」

M Pはすぐさまホテルのロビーに行き、事の次第を話す。ホテルの従業員は警察を呼び現場検証をする。被害は、M Pの荷物一式全部：但し、パスポートをはじめ、クレジットカードや身分証明書等の貴重品はM Pが身に着けていたので無事であった。

M Pは、今度はホテルのある所轄の警察で再び事情聴取を受け、被害届を提出し、次にD国大使館へ行き、盗難についての事情を説明した。

それから、ホテルに戻ると、S Bからの話と言う事でホテルから追い出された。

再び「(どうしよう…)」と困って、D国の会社に電話したら、

『(D国語で) 大事な顧客S Bに大怪我を負わせた…損害賠償やら契約不履行の違約金等の支払いで、会社は大損害を受けたので、お前はクビ…帰りの飛行機代は払わないので、自力で帰ってくるように』

と冷たくあしらわれた。M Pは会社からの仕打ちに愕然とした。

「(なんとかS Bに取り成し貰わないと…国に帰れない…どうすれば…)」

M PはS Bの入院している病院の待合室に行くが、その先が思いつかない。

悩んでいる内に、病院の面会時間が終わり、待合室から出て行くように職員に言われた。

その時、病院の駐車場にI M達と一緒にS Bの見舞いに来ていたI Yの姿を見かけた。M

Pは慌てて、車を発信させようとするI Yの車の前に立ちふさがり、

「I Y助ケテ！」

いきなり、目の前に大きな女性が車の前に立ちふさがったので、I MとU K、I Yは

「[[[ナニ?]]]」

と仰天した。

「ワタシ行くとコナイ! 助けてほしいヨ」

とMPが懇願したので、IMがIYに

「取り敢えず、乗せてあげたら」

と言われ、IYはMPを車に乗せて病院の駐車場を後にする。

その道すがらMPに立て続けに起こった不幸を知る。

「あんた散々だったねえ…」

同情するIM。

「まあ…落ち着いたら、あたしがSBに取り成してみるよ…」

「アリガトございます」

「それまで、IYあんた面倒見たら…同業者だし…」

と無責任に言われ、IYは

「えー」

と嫌そうな顔をしたが、IYはIMとUKを自宅に送ると、MPを乗せたままY国際港に向かった。

●白山亭と碇屋とMP

B県領地Y国際港駅前の白山亭…IYは車を商店街と運河を挟んだ駐車場に止め、MPを連れて白山亭に向かう。IYが白山亭の入り口ドアを指して、

「ここが私の勤め先」

「…ここが白山亭…」

と独り言を言っつて白山亭の入り口の看板を見るMP

「知ってるの？」

IYがMPに聞くと、

「うん…死んだばあちゃんここで働いていたネ」

MPは白山亭の看板を見上げたまま返事をした。

「エッ」

MPの返事に驚くIY

「ばあちゃん、白山亭のおかみさんのお陰で生き延びて、国に帰る事できたヨ」

MPはIYを見つめる。

「そーなんだ」

とIYが不思議そうに言うと、MPは

「でも、IYの勤め先ここじゃないネ」

と言って、再び白山亭の看板を見る。

「？」

「だって、碓屋と言ってたネ」

「そうよ、この白山亭の裏に碓屋があるの」

とIYは「碓屋」の事を「男屋」にあるガンスミス工場の意味で話すと、MPは驚いて、

「エっ？碓屋って、あの…じゃIY娼婦カ？」

IYの言葉に驚き、MPはIYの肩を掴む。IYは肩を掴んでいるMPの手を払いのけて、

「何だとー、私は娼婦ではない…って、もしかしてあなた昔の「碓屋」の事言ってるの？」

途中からトーンが変わる。キョトンとして聞いていたMP、

「ばあちゃんの話では、白山亭の一部の女給は、裏では「娼館碓屋」の娼婦だったネ」

と言うと、IYは眉をひそめ「(こいつ…准尉の言っていた昔の碓屋の商売の事知ってるんだ…)」と驚いた。IYはMPの誤解を晴らそうと、

「娼婦は、とうの昔に国の法律で禁止されたわ…今の碓屋はガンスミスとエージェント派遣会社よ！」

「そーなの？」

逆にMPが驚く

「そう！」

IYはMPに対して、キッパリと言って白山亭の入り口の扉を開けた。

「IYお帰りー」

「ただいまあ…」

IYはMPを連れて白山亭の入り口を潜る。IYの姿を見て女給姿のIAが迎える。この時間白山亭はPub営業の時間であり、バーカウンターにHGが入っていた。

「お帰りIY。SBさんが撃たれたそうだね…夕方のワイドショーは、その話題で持ちきりだ！で、どうだった？」

「はい、SBさんは左の脹脛を撃たれました…あのままでは明日のコンサートは出来ないでしょう…」

「そうか…」

とHGは暗い表情になったが、真顔になり、

「ところでIY…後ろの人誰？」

HGはIYの後ろに立って、IYの後ろから頭一つ出して、HGを見ているMPを指さした。IYはHGが指差しているMPを見上げて、

「ああ…そうですね紹介します。こちらはSBさんのボディガードだったMPさん…この方は私の勤め先の社長のHG」

と言うと、HGは親し気に、

「白山亭ならびに碓屋の社長HGです。始めまして」

「ハジメマシテ、ワタシMP言います。D国から来ました。D国のエージェント機関DSFに所属していました。…さっきクビになったね」

「？」

「准尉、あのですね。実は…」

I YがM Pの来皇の目的と、護衛対象のS Bが銃撃されその際に拳銃を奪われた事、彼女からS Bからボディガードをクビにされたこと、また会社からもクビになり、おまけに泊まっていたホテルでは荷物を盗まれた上追い出され、国に帰れなくなった事を話した。

「…それは、大変だ…」

と驚くH GにI Yは

「それですね、准尉。この人、ここに泊めても構いませんか？」

とI Yが言うと、

「シャツチョーサン…おねがいネ」

M PはH Gに手を合わせた。

「あんた…わざと言ってるだろ！」

I YがM Pをどつくと

「アハハ！ばれたか」

と言って、M Pが笑った。

「それは、別に構わんが…母屋は畳間だよ。布団で寝れるかね…」

とH Gが怪訝そうに言うと、

「ダイジョーブ。ワタシ昔、この国に留学していたね。その時畳の部屋で、布団で寝ていたヨ」

とM Pはニツコリ笑って応じた。そんなM Pに対して「(留学していた割には、皇国語にちよつと問題あるなあ…)」と、H Gは思った。

●M Pの出自

母屋の食堂でM Pと夕食を共にしたI Y…M Pが出された食事に好き嫌いなく平らげた

ことに驚く。

食後、世間話をしていると、

「ワタシの家、今D国に併合されたけど、昔D国に隣接していた小国の貴族の家柄ネ…ばあちゃんの子供時代に国で内戦あったヨ、ひいばあちゃん、ばあちゃんとばあちゃんの姉連れて皇国に逃げてきたヨ…皇国に逃げてても貴族の称号は通用しなかったネ…その内ひいばあちゃん病で死んだネ…ばあちゃんとばあちゃんの姉、路頭に迷ったネ。浮浪児の真似事している時に『白山亭のおかみさん』と言う人に拾われたネ。そして白山亭の女給として働いて、国の内戦が終わったら、国に帰ったネ」

「それって…」

IYは遺影のある部屋の棚から、古いアルバムを持ち出すと、MPに見せた。MPはアルバムを捲り一枚の写真に手をとめた。そこには、白山亭の女給姿の外国人らしき女性が写っていた。

MPは、胸の谷間からロケットを取り出すとそれを開いた…そこには二組の夫婦の写真が入っていた。

「こっちは、ワタシのパパとママ、こっちは、ばあちゃんとじいちゃんヨ」

と説明し、MPは祖母と説明した写真とアルバムの写真を見比べていた。そして、MPは顔を覆って涙を流し始めた。

「どうしたの？」

「こっ、この写真、ばあちゃんとばあちゃんの姉、写ってるネ…こっちがばあちゃん、こっちがばあちゃんの姉…」

MPの説明によると、写真に写っている人物の、手前の女給服姿の外国人はMPの祖母の姉、奥に写っているがMPの祖母だそうだ。

「なんで分かるの？」

とI Yが訊ねると、MPは自分の目元の黒子を指して、

「目元の黒子ネ…ワタシのばあちゃんはワタシとおなじところに黒子あるヨ。ばあちゃんの姉、黒子鼻にあるネ」

「言われて見れば…確かに」

I Yが遺影のある部屋に居るH Gの曾祖母の霊を見ると涙している様に見えた…「MPは白山亭に縁がある人なんだ…」と思った。

その晩、店（白山亭）を閉めて母屋に戻ったH GにI YはMPと一緒に、MPの祖母が白山亭で女給をしていた事を話した。

H Gは写真とMPを見比べて

「この写真は曾祖母の時代のもので、当時の事情とこの写真を撮った理由については、俺は知らん…ただ、商店街会長の親父さん（葛葉組の組長）に、この写真の他にも、港（Y国際港）に外国の戦争から逃げてきた女性とか、戦災孤児とか、当時の碇屋の娼婦と外国人船員との間に生まれた子が、白山亭と碇屋で住み込みで働いていたと言う事を聞いている…だから、MPの話から、お祖母さんが祖国の内戦で皇国に来てここで働いていても、それはあり得る話だね」

そう言いながら、H Gは複雑な表情をした。

●なんでもデカけりやいいってもんじゃない！

H Gは

「彼女（MP）を拾ってきたのはI Yお前だから、MPの面倒を見る様に」

とI Yに言いつける。その言葉に不満げなI Y…それに対してMPは嬉しそうにしていた。

「今晚は、ここで寝て」と言って、I YはMPを母屋の2階の空いている部屋に案内し、布

団部屋から布団を一式持ってこさせた。

「ワタシ、パジャマないよ」

とMPが言うので、

「あなた、身包み剥がされてここに転がり込んだんでしょ！贅沢言わない…第一あなたに寝巻貸したくても、あなたの図体に合う寝巻誰は持ってないわ…」

とIYが不満げに言う。

「どしたの？」襖の向こうからHGの姪HMが顔を出す。MPの姿を認めると

「ずいぶん大きな外人さんねえ…」

と言って、驚く

「あつ、HMさん。夜中にゴメンなさいね。この人当分の間泊めることに事になったので…」

とIYが申し訳なさそうに言うのと、HMは、HY・IYに始まり、TY・IAに至るHGへの弟子入りで母屋の住人が増えた事を思い出し、呆れたように

「また、叔父さんの酔狂？その身長じゃ、ここには合う寝巻がないわよねえ…」

と言って、HMはハタと

「そーだ、叔父さんの浴衣着ればいいんじゃない？わたし、叔父さんから借りてくる」

と言って、HMは下の階に降りて行った。

MPはIYに

「あの人ダレ？」

と訊ねた。IYは、

「あの人は、准尉…社長の姪でHMさんと言うの…近くの病院の看護師さんよ」

「へえー」

やがてHMがHGの浴衣と帯を持ってきた。「はい…洗ってあるからオヤジ臭くないわよ」

と笑ってMPに渡す。受け取ったMPは「オヤジ臭い…ナニ？」とHMの冗談が理解経出来

なかった。MPは渡されたHGの浴衣を広げ

「おー、ユタカ…」

と言った。それを聞いてIYは「『浴衣』の間違いね…面白そうだから訂正しないでいよう…」と突っ込みすら入れない。浴衣を手にしたMP。IYに対して、

「…IY」

「なに？」

「シャワー浴びたい…ダメ？」

とMPが言った。IYも入浴したいので、

「MP、お風呂行こう」

「風呂？入れるの？」

「あるわよ…この家の風呂は24時間入り放題だから…」

「オー、素晴らしい！」

IYはMPを連れて1階の風呂場に案内する。MPは母屋の風呂場を見て「オー風呂屋…」と言って感激していた。

「ここに、脱いだ服入れてね」

とIYは脱衣籠を示す。MPは早速服を脱ぎだす。IYがタオルや石鹸とか脱衣所にある自分用の棚から取り出している間に、MPは素っ裸になって、タオルも持たずに脱衣所と浴槽を仕切る引き戸をあけ放って、洗い場に入る。

「ちよっ…ちよっとMP！」

IYが慌てて声をかけると、MPは「エッ？」と言って振り向いた瞬間、足元が滑り豪快に転倒した。その転倒による振動は母屋全体を揺らした…それを見てIYは「あちゃ〜」と言って、手で額を覆った。

「イデテ…」

腰を抑えて起き上がるMP

HG「どうした!」

HM「どうしたの?」TY「なに?」HY「なにがあつたの?」IA「ボイラー爆発したの?」
(ボイラーは男屋です(笑)作者)」

母屋に居る人達が、風呂場集まる…母屋の住人は女性だが、その中には、家主で母屋唯一の男性HGも居た。

HGはタオルすら持っていない素っ裸のMPを見る…次の瞬間そこに居た全員に「「見ちゃダメー!」」と言われて脱衣所から追い出される。「なんかスゲーもの見た…」と言う

HG…

「すみません!彼女が洗い場で滑って…」

とIYが「(なんで私が謝らなきゃいけないの…)」と思いつつ、謝罪した。それを聞いた一

同

「「あー、びっくりした」」

と言って安堵した。そして、皆落ち着くと、その場で服を脱ぎだした…

「皆さんどうしたの?」とIYが訊ねると

「「いや…ナニ…」」

と口々に言葉を濁す…IYは「皆さん、MPに興味(特に身体)あるんだ…」と察して苦笑した。

急遽、夜中の母屋浴場で女性陣による裸の懇親会が始まる…皆、MPの高身長に加えスリサイズに圧倒される。それぞれ自己紹介を始めた。

「改めて初めまして、私はHGの姪のHMよ」

「初めまして、わたし准尉…じゃなくて社長のHGの2番弟子のHY」

「はじめまして、わたしTY…社長の3番弟子」

「初めまして、あたしIA…えっ？あたし…社長？それともTY姐さんの弟子…どっち？」

IAは慌てる。そんなIAにTYが

「あんたは社長の番外弟子…で、いいんじゃないの？」

「ええー、そんな…」

と言ってIAはいじけた。

「みなさん、はじめマシテ。MPいいいます。D国から来ました」

と言って挨拶をすると、

「IY」

「なに？」

「IYはシャチョー（HG）の何番弟子カ？」

「私は…1番よ…（本当はHY先輩の方が1番だと思うけど…准尉もHY先輩を頼りにしているし…弟子入りを言い出した順でHY先輩が譲ってくれたのね…そうじゃないと…TY先輩が困るものね…）」

…HGが定年退職する前に居た、民兵会社での教え子の順番で言うと、HY、TY、IY・

IA（IYとIAは同期入社）…F県領地事件後の弟子入り宣言順に言うと、IY、HY、

TY…TYの弟子IAとなる。作者注

「ソーカネ」

と言って、MPが頷いた。

MPは洗い場で体を洗っているHYを見て、浴槽から立ち上がって、

「HY、シャチョーの2番弟子アルカ？まだ子供なのに？」

と指さして言った。H Yはいつも言われている事なのと、初対面でしかも外国人のM Pなので、平静を装い

「そうよ…ところでM Pさんおいくつ？」

『おいくつ』…って、ナニ？」

「H Y先輩はM Pの年齢を聞いているのよ」

とI Yが言うと

「ワタシ、24…H Yは10代か？色々幼い…」

M PはH Yの裸を見て言った。他の人達は「（あー言っではいけないものを…あんた

(M P)の体つきなら尚更…」と思った。

「ちよつとM P！あんたねえ…失礼な事を…H Y先輩は一番年上だけどキュートで可愛いところが魅力なのよ！」

とI Yが、フォローになっていないフォローを言うと「（あーあ…言っちゃった！）」「（と周囲は思った。

「なんでも大きければいいってもんじゃないんだーあ」と言っつて、桶の湯をかぶり、H Yは泣いて風呂場を飛び出して行つた。

「あーあー、泣かしちゃった…」

I Yを責めるT Y…ハッとなったI Y

「私…とんでもないことを…どーしましょーT Y先輩いー」

I Yは蒼くなって、T Yにフォローを求めるが、T Yは素っ気なく

「わたしは知らん」

「そんなー」

後で、I Yは同室のH Yが怒って口を聞いてくれないので、実家（B侯爵邸）から貰つて来た秘蔵の高級ブランドを差し出して謝った。（H Yは大のお酒好きです。作者）

秘蔵のブランドーをH Yに渡してしまったI Y…ふと、思いついてM Pの部屋に入る。

「ナニ？I Y」

「M Pチョットいい？」

「ハイネ」

「あのね…この館…実は出るのよ」

「デル？なにが」

「ゆーれい…」

と言って、M Pを怖がらせようとしてI Yは幽霊の独特の仕草をするが、M Pはキョトンして、

「ナニそれ？」

と言った。M Pの反応にI Yは「(皇国に留学してたくせに！)」と腹が立った。そして更に

「お化けよ、オバケ！」

と言うと、M Pは目を見開いて蒼くなり、

「オバケ怖い！」

と言って、I Yに飛びついた。I Yは「(ヤッター、M Pの弱点見つけたー)」と思うのも束の間、M Pの強力な締め付けに締め落とされそうになる。

「ちよつと！M P！！ギブギブ…」

I Yは薄れゆく意識の中、そのままM Pに抱き着かれたまま、一晚を過ごした。

●めんどくせー、代打T Y

芸能事務所〇×エージェンシーのMK社長から、S Bの護衛任務の依頼が来る。なんでもS Bから直接、碇屋に指名依頼があったそうだ。

それを聞いて、H Gは昨日、S Bが自身のボディーガードのM Pをクビにしたので、その

代わりを探していて、I Yと同じエージェント会社からボディーガードを派遣して貰おう
と聞いた事は想像がついた。

H GはM K社長がS Bのコンサートが潰れたので、チケットの払い戻しとか、コンサート
会場とかスタッフに対する契約の違約金はどうの…とか言い出さないで、儲け主義のM
Kにしては珍しいと思ったが、I Yの話では、今回のコンサートはD国のS Bの事務所が仕
切っているの、逆にM K社長の芸能事務所にはS Bの事務所から莫大な違約保障金が入
ってくるようになったそう。

H Gは「めんどくせー」と言って、T Yを派遣する事にした。

S Bは、D国語なので通訳が傍に居るが、一応T Yに自動翻訳機器を持たせ、彼女が入院
している病院へ向かわせた。

I Mの警護については引き続き、I Yが行う事になった。

S Bを襲った暴漢について、なにか手掛かりがないか思案するH G。親戚の港町警察署の
署長に訊ねるが、知らないとの事。

一計を案じ、H GはやむなくB侯爵家秘書に電話を入れ、以前B侯爵家の警護依頼でB侯
爵家令嬢B Kが暴漢に襲われた事に、B侯爵家子息B Cの学内でのトラブルが絡んでいて、
B Cの身辺警護に皇国国家公安局を利用していたので、なにか連絡を取る方法がないかを
訊ねた。（「巻き込まれ親父の子守唄」参照）

午前中の白山亭フロア内：

「ちよっと、あんたM P」

「ナニカ」

「髪くらいまとめなさいよ！そんなんじや、ばあちゃん泣くわよ」

と言って、MPの赤いくせ毛を引っ張るIY。

「(D国語で)何で?」

とD国語で聞き返すが、IYはお構いなしに、

「衛生上、問題があるの!」

と言って、MPをバーカウンターまで髪の毛を掴んだまま引っ張る。MPの髪を簡単に輪ゴムで縛り、そこに在った台布巾でMPの後頭部を被って、MPをバーカウンターから押し出す。(乱暴です(笑)作者)

MPは白山亭のアルバイト見習いとしてIYの指導の元、女給服を着て居た。

…よく、MPのガタイに合う女給服があると思いますの読者諸兄が居ると思いますが、MPの祖母姉妹のいわば形見と言える女給服が発見され、それを着ています…なので、少しスカートとシャツが短いです(笑)作者注

「つたく、世話が焼けるわね!あの提灯鮫鰯(MPのアホ毛の事)…」

とIYが言って、入り口付近のいつもの席に居る港町水上警察署の捜査官KJに、MPに対してちよっかいを出さない様にと釘を指しに行こうと、入り口まで来たら、表の通りに黒塗りのリムジンが止まっているのを窓越しに認め、リムジンからB侯爵秘書と一人の男が車から降りてくるのを見かけ、IYの顔色が一瞬曇る。

「いらっしやいませ…」

応対したIYに、B侯爵秘書が

「HG社長はいらっしやいますか?...Yお嬢様」

「はい、カウンターに居ますので、ご案内します」

バーカウンターに居るHGにIYが

「お客様をお連れしました」

と言って、バーカウンターの席を勧める。二人は席に座り、HGに白山亭オリジナルコーヒ

ーを注文する。

コーヒ―豆を電動ミルで挽き、二人の前でコーヒ―をサイフォンで淹れる。サイフォンを操作しながら、

「昨日は、どうも…いきなり連絡してすみません」

とH GがB 侯爵秘書に謝る。

「…ええ、突然ことで驚きましたわ…あのH G社長から侯爵様にではなくて、私に対して連絡が入りましたから」

すました表情で、ため息交じりに抗議する様な口調でB 侯爵秘書が答える。

「でも…侯爵様抜きでここのコーヒ―をゆっくり味わって飲めるので、ある意味ここに来る意味がありますけど」

と相変わらず澄ました口調で言うので、

「はは、そうですか…」

H Gは苦笑いをした。

「…で、そちらのお方は？」

H GはB 侯爵秘書の隣に居るにやけ顔の男に視線を送る。すると男はB 侯爵秘書の紹介を待たずに、

「初めまして、皇国国家公安局のI Sです。この度はこちらにおられるお方（B 侯爵秘書）のご紹介により、参上しました。我々国家公安局も碇屋社長H Gさんには以前から興味がありませんので、この機にとばかりに急ぎ参じました」

と自己紹介をした。それにH Gは「時間がかかると思ったが…すぐに国家公安局の人が来るとは…」と内心驚いていた。それを顔に出さずに

「…ほう…私に？」

「はいH G社長、あなたがF 県領地の事件（「巻き込まれ親父の撤退」と「巻き込まれ親父

の反撃」参照）を短期間で解決した腕前に我々は興味を持っています」

H Gは「(流石、国家公安局…あの事件について調べていたか…下手に隠し事出来ないな)」
と思ひ。

「…あれは、如何にあそこ(F県領地)から逃げ出すかを考えている間に情報収集をして、それを元に推理しただけですよ…それに逃げる途中で出会った前に居た会社の元同僚と部下達を無事安全地帯に逃がすと言う使命感もありました…結果、元同僚の任務遂行の為に大臣と大使を確保する任務を手伝う羽目になりましたが…」

と言って、H Gは苦笑いをした。

「いやいや、ご謙遜を…その他にF県領地の核施設と北の海岸を占領している隣国の反政府組織勢力の排除もH G社長の立てた作戦と聞き及んでいますよ」

I SはH Gに向かって屈託のない笑顔を見せる…それが本心なのかそれとも欺瞞なのかはその表情からはH Gには判別できなかった。

「さて…ご依頼の件ですが…」

と言ったところで、H GがI Sを手で制して

「ここで、よろしいので？何なら個室をご用意しますが…」

「はは、大丈夫ですよ、こういった話は密室の様な閉鎖空間でやるより案外オープンな所でする方が怪しまれませんよ…それに、ここに居るのはお客以外…すなわち店員さんは皆碇屋関係者でしょう…まあ、警戒するとすれば、入り口側の席に居る彼…位いでしょか…」

「バレましたか…はは」

白山亭のフロア内には女給姿のI YとI A…それから見習いのM Pが居た。また入り口側の席には港町水上警察署の捜査官K JがI Y目当てに座っていた。

I Sはカウンター席に座って、H Gが淹れたコーヒーカップを持ちながら

「結論から言いますと、D国から来皇した人気歌手のS Bさんの命を狙っているのは、D国

与党の議員が雇った殺し屋“銀狐”と呼ばれる女殺し屋です」

「ほう…」

「銀狐の殺しの方法は、自ら銃器を持たず、相手のボディーガードをまず襲い、携行している武器を奪って、ターゲットを殺す…と言う手口です。また彼女は変装の名人で、ターゲットの身近な女性に成りすまして、近づいて来ます」

それを聞いて、MPが背後から構えた拳銃を素手で払い落とされ、それを奪われてターゲットのSBを銃撃した事を、IYとMPが話していたことを思い出す。

「…現在我々が把握して、あなたに公開できる情報は残念ながらこれだけです。我々も“銀狐”の潜伏箇所を現在探している最中です。近日中にそこに居るD国から来たSBさんのボディーガードをクビになった彼女の荷物が戻ってくると思います」

と言って、ISはにやけてフロア内で鼻歌歌って歩いているMPをチラリと見た。

その言葉にHGは「なにもかもお見通しですか…」と言うと、ISは「それは…ねえ」とニヤリとして言った。

ISは隣に居るB侯爵秘書がコーヒーを味わっているのにタイミングを合わせて自身もコーヒーをゆっくり味わい、飲み終わると。

「ごちそうさまでした…B侯爵様がおっしゃるように、美味しいコーヒーでした。今度ここに来る時はこの案件（SB暗殺計画）が解決してからになりますでしょうか…その時また…」

HGは「ほおー、B侯爵様が…」と言って「（B侯爵秘書から国家公安局に話が行ったのではなく、B侯爵様本人から話が行ったのか…だからこんなに早く…そして、それを悟られまいとB侯爵様が来店しなかったのか）」とISの言い方から、HGは悟ると共に、B侯爵の深謀遠慮に感謝した。

HGの考えを見透かしたか「はい…」と言ってISとB侯爵秘書が席を立つ、ISが懐から財布を出したので、

「あつ、お代は…」

とHGが言いかけるとISは手で制して

「ただで美味しいコーヒーを飲むと、贈賄になりますので…あつ、領収書下さい。宛名は、

〃皇国国家公安局〃で…」

と笑って、ISはレジで支払いを済ませた。

HGが、IS達が使ったコーヒークップを片付けていると、ISの使ったコーヒークップの下から、ISの連絡先が記載されているメモがあった。

●緊急招集

昼食時、HGは銀狐を陥れる策を考える。

「（銀狐は体術に優れた殺し屋なのだろう…接近戦ではHYやIYでは敵わないと思う。その点、TYには警棒と言う得物があるので、ある程度対抗できるだろう…さて…」とおもむろに、自室の引き出しから模造銃を取り出し、HYを呼んだ。

「准尉、何でしょうか？」

「碓屋のエージェント、全員緊急招集！…って、言ってもTYは出先（SBの入院する病院）だから、TYはスマートフォンでのオンライン参加。あとMPも」

「はい」

母屋の食堂にHY、IY、IAとMP…スマートフォンでTYが集まる。

「アテンション（傾注!）」

HGの言葉に皆緊張感が走る。

「皆、聞いてくれ…国家公安局からSBさんを襲った犯人に関する情報を手に入れた。」

「『ええっ！いつの間に…』」

一同驚く、

「実はB侯爵様の伝手で国家公安局とつながりを持つことができた…」

H Gの言葉に暗くなるI Y。I Yの実家はB侯爵家…I Yは家を出たので、今は母方の姓を名乗っている…それを見たH G「(まだ、実家との間に蟠りがあるか…許せ)」と心の中で謝罪する。

「で、S Bさんを襲った犯人は“銀狐”のコードネームを持つ殺し屋だ。D国与党の議員が雇ったそうだ…銀狐は体術に優れているらしく、その殺しの手口は、自ら銃器を持たず、相手のボディガードをまず襲い、携行している武器を奪って、ターゲットを殺す。また銀狐は変装の名人で、ターゲットの身近な女性に成りすまして、近づいて来るそうだ」

それを聞いて、I YとM Pは「(あの時…構えた拳銃を払い落とされて、M Pの拳銃でS Bさんが撃たれたんだ…)」とチャリティーオークションのステージでの出来事を思い出した。

「銀狐は近いうちにまたS Bさんを襲うに違いない。病室で寝ている彼女は絶好のターゲットだ。室内の接近戦ではH YやI Yでは敵わないと思う。その点、T Yには警棒と言う得物があるので、ある程度対抗できるだろう…と俺は思っている」

『はい、任せてください』

とスマートフォン越しにT Yが張り切って返事をする。

「いいか、T Y！相手は殺し屋なので、情け無用…なのと、変装の名人なのでS Bさんの病室に入る人のチェックを厳重にする様にしてくれ」

『はい』

「それと、俺の次の手だ」

と言って、H Gは模造銃をT Yに対してスマートフォン越しに見せる。

『准尉、それは？』

「模造銃だ、これなら不意を突かれて奪われても、少なくとも撃たれることは無い、敵は最

初にお前の構えている拳銃を払い落とすはずだから、この銃を構えて敵に落とされ、その後警棒で敵の拳銃を叩き落すか頭をがち割れ…」

『はい』

「TYに対する戦法の指示はここまで…模造銃は、HYに持たせる。油断するな」

『はい』

その後、母屋ではMPをどうやってSBに近づけるかを考える会議が始まった。

HGの“親父モード”で会議が始まる。

HG「会議の目的は、SBさんの命を狙う銀狐からどう彼女を守るか…それが第一。次にこちらの人手をいかに効率よく配分するか、そして最後、SBさんのボディーガードをクビになったMPをSBさんの近くに配置して、できればMPの信頼を回復する事にある」

IY「まず、MPの顔がSBさんと、銀狐の両方に知られている以上、これを何とかしないと…」

HY「変装させるしかないわね」

IY「特徴的なMPの赤い髪の毛を金髪のカツラをかぶせて隠し、眼鏡をつけさせ、目元のホクロ等は化粧で誤魔化すのは？」

HG「ベタな方法だが、MPの赤い髪は目立つからなあ…あと、その背…」

HY「身長の方はこの際あきらめましょう！」

HYがMPの高身長についてバツサリと言ったので、「(HY先輩…それを言ったら…)」とIYが心の中で突っ込みを入れた。

HG「…そうだな、IYの言う『金髪のカツラ』で外人と言うキャラクターは、皇国の人にはそのまま別人に見えるので、身体的特徴の変更はそれ以上しないと言う事で…」

いつもなら、この話に積極的に参加しそうなIAが珍しく入ってこないなので、HGはIA

を議論に巻き込むため、質問を投げかけ参加させようとして（MPはHG達の掛け合いの様な話し合いをして作戦を練る事を知らないので、傍観者として見えています。作者注）、

HG「変装したMPをSBさんの近くに配置するには、どうしたらいいと思う？IA」

IA「ハッハイ」

HGから突然指名されたので、IAは驚きつつも、

IA「MPを碓屋のニューフェイスとしてIYのアシスタントとするのはどうでしょうか？」

HY「それって、SBさんにバレない？ウチ（碓屋）にMPが居ることをSBさんは知っているんじゃないの？」

IY「それはないと思います。MPがウチに居るのを知っていたら、SBさんの警護依頼を本人から指名されないと思いますが…TY先輩もSBさんにMPの事話していないと思います…多分」

HY「ホントに？」

HYがIYの顔を覗き込むようにして訊ねた。HYの言葉にIYは自信がなくなり、

IY「…多分」

と言うと、HGが

HG「TYに至急確認！」

IY「ハイ」

IYがTYにメールで確認すると、『MPの事はSBさんに話していない』との返事があった。

HY「…そう、でも無理があるわね。いきなり外人のアシスタント投入と言うのは…」

IA「はは、ダメですか」

としよげるIAに気づいたHYが慌てて

H Y 「ダメじゃなくて、 “外人” と言う点を解消すれば、いいのよ」

この会議では、提案歓迎、全面否定はN G、人の提案を改善するのはO Kなので、H Yはその禁忌を犯したのに気づき、I Aをフォローする。H GはH Yの発言に指摘をしようとしたが、H Yが自ら気づき修正したので、指摘しないことにした。

H G 「ウチのニューフェイスにする案は一旦置いて、別の案はあるかI A」

H G再度I Aを指名した

I A 「そうですね。ウチのニューフェイスでない方法と言えば… I Mさんの所属する芸能事務所○×エージェンシーのスタッフとするとするのはどうでしょう?」

H Y 「成程ね! ○×エージェンシーのスタッフにするはいいかも、もつと言えば、○×エージェンシーの芸能人に仕立て上げるのはどう?」

I Y 「スタッフと言えば、I Mのスタッフにするのはどうでしょう? コンサート会場に出入りし易いし」

I Yの発言を聞いて、I Aが

I A 「いつそ、こつち（皇国）に来ているS Bさんのコンサートスタッフにするのは? いくら彼女でもコンサートスタッフ全員の顔は覚えてないでしょうし…」

H Y 「それ… いいかも!」

話が変わる方向に向かいそうになったので、H Gが修正する。

H G 「もう一度よく考えてご覧、銀狐の目的は何だった?」

I Y 「S Bさんの暗殺…」

H Y 「そうだった!」

I A 「すると、S Bさんが動けない今がチャンス!」

H G 「だよな」

I Y 「…コンサートスタッフ云々より、病院のスタッフとかにして潜入させる方法を考えな

いと…」

H Y 「そうね」

I A 「病院のスタッフにするにしても、M P と会話したらバれますよね」

I Y 「…それが問題なのよねえ…皇国語滅茶苦茶だし…」

と言ったのを聞いて、H G と M P が苦笑いをした。

H Y 「…そうすると、I A の言った『M P を碓屋のニューフェイスとして I Y のアシスタン

トとする』は、良い線かも…」

I Y 「ですね」

H Y 「ゴメンね、I A の提案全否定してしまつて…」

I A 「いえいえ…そんな」

I Y 「…と言う事は、『外人』のキャラクターを変えるしかないわね…黒髪のカツラにするしか…」

H G 「変装はともかく、ウチのユニフォーム着られるかね？」

H Y 「…(笑)」

I Y 「T T さんのユニフォーム借りてきましようか？」

H G 「…そうだな」

M P が T T と同じくらいの身長があるので、T T の碓屋の制服(T T は碓屋の社員ではないですが、T T の位置づけ上、碓屋の制服を作っています。作者注)を着させてみる…T T が細身のため、スカート、スラックスが入らない…またジャケットもおれず…

防弾機能付きのベストも H G 用の男物を着けても、胸がきつくてボタンが閉まらない…

H G は「…この制服、オーダーメイドの特注だし…」と言う。

人が大勢居る空間では人の姿・顔より、着ているモノで判別されることが多く、またカム

フラージュになる。

なので、碓屋の制服が、S Bが入院している病院で行動するための意味パスになる。

警護のT Yが碓屋の制服を着ているため、同じ碓屋の制服をM Pが着ていれば、S Bや病院側にとってはT Yと同じ位置づけになるし、他の通訳やマネージャーあるいは暗殺者の銀狐と区別できる…もともと、銀狐が碓屋制服またはそれに近いものを着てS Bに近付く事は可能であるが、その場合はT Yが人物を特定できる。ただ、碓屋の制服が無く変装したM Pについてはそれが不可能である…さて、どうしたものかと…H G達は、良案が見つからなくなった。

「…どうも、いい案が浮かばんな…一旦ブレークしよう…H YはこれからT Yの所に行ってくれ。T Yに模造銃を渡したらすぐ帰ってこい」

「はい」

H Yが模造銃を持って行くのを見送り、H GはI Yに

「I Y」

「はい」

「これからS Kの所に行って、次の銀狐の襲撃に対応するため、M Pの拳銃を用意しろ…M PはI Yについて行くように」

「はい」「ハイネ」

●ここで一服

午後、I YはM Pを連れて男屋に行く。S Kに話をして、ガンラックからM Pの使えそうな拳銃を選ぶ。

「M P、貴女の拳銃は私の拳銃と同じ（正確に言うと、M Pの拳銃の小型改良型をI Yは使っています）なので、これではどう？」

と言って、M Pの使っていたのと同じD国メーカー製の最新式拳銃を示すが、M Pは何だか気に入らない：M Pはガンラックの中から、D国の別のメーカー製の拳銃を選ぶ。

「これがいい」

「ガタイの割に、ずいぶん小さな拳銃選んだわね」

驚くI Yに

「そうかネ？この拳銃見栄えの割には、同じ会社の自動小銃と同じ機構を採用しているネ。だから命中率は良いネ：ワタシ家ではこの拳銃使ってるネ」

と言いながらM Pは手に持った拳銃を構える。それを見たS Kが

「お嬢…決まったか？」

「はい、軍曹」

「じゃ、お前が調整してやんな」

「はい」

「I Y」

S KとI Yの会話を聞いていた、M Pが不思議そうに、I Yに訊ねた。

「なに？」

「昨日から、会社の上役の人の名前呼ぶのに、軍の階級で呼んでるネ…なんで？」

「それはね、渾名…」

「渾名？」

「H G社長は、私が民兵会社に居た頃の社長の階級。あちらに居るS Kさんは兵役時の階級…今は二人とも除隊しているから、昔の階級で呼んでいるの」

「へえー」

作業の区切りをつけ、“男屋”の工場を出てS Kはいつもの様に母屋の縁側に行く。それ

について行くI YとM P。母屋の縁側にはいつもの様にお湯の入ったポットと盆の上にお茶の道具が一式置いてある。

S Kは縁側に座るなり、部屋の奥にいるH Gに対して

「オーイ、タバコあるか？」

「あるぞー、何がいい？」

とH Gが気さくに聞き返す。H Gは思い出した様に、手元のパイプたばこの缶を持ち上げ、

「そうだ、皇国煙草公社の新発売のパイプたばこあるぞ」

「いいねえー、それくれ…あと、俺のパイプ持ってきてくれ…」

「わかった」

I Yはお茶を淹れて、S Kに渡す

「おお、ありがとう」

と言って受け取る。M Pはそんなやり取りをキョトンとして見ていた。I YはM Pにもお茶を出す。

「S KとH G…どちらが立場上？軍の階級から言うと、H Gが上かネ…」

「ガハハハッ、そんなの決まってる。H Gだよ」

S Kが笑って即答した。そこにH GがS Kのパイプセットを持って入る。

「なんの話だ？」

「なに…お嬢（I Yの渾名）が面倒を見ている外人のネエーちゃん（M P）…俺（S K）とお前（H G）の上下関係が分からないってよ！」

「そりゃ、ビジネスパートナーだけど、スポンサーは俺」

と言って、H Gが親指で自分を指した。

「ワカッタネ」

そう言って、M Pはお茶を一口飲む。

「M P、お茶もいけるかね？」

とH Gが聞くと

「ワタシ、お茶所のS 県領地の国際大学に留学してたネ」

それを聞いたH G「あの留学生だらけの国際大学か…どうりで皇国語が怪しいはずだ」
と思った。

「それは、そうと。言っていたパイプたばこくれ」

相変わらずマイペースなS Kに

「おう、これ」

とH Gがパイプたばこの真新しい缶を出す。早速二人はパイプに詰め始める。M Pそれを見ていて、

「ワタシも、パイプたばこ吸うね…ナニかパイプ貸して欲しいネ」

「なに？お前もタバコ吸うのか？」

S Kが言うと、

「ワタシの国、パイプの老舗のメーカー多いネ、タバコも国営や民営のタバコメーカーや隣国にも有名なタバコメーカーあるヨ」

「あつ、そうだった、そうか…じゃこれ使うか」

と言って、H Gは持参したパイプセットから真新しいパイプとタンパーをM Pに渡す。それを見てM Pが

「アイヤー、これ新しいパイプネ。そんな、もったいないヨ…」

とH Gの渡したパイプを手にして遠慮していると

「別に…これ俺の作った奴（パイプ）だし…」
と言うと

「エッ？これ作ったのH Gネ？H Gパイプクラフターか？」

「そうだよ…あげるから遠慮なく使え」

「はいー、貰うネ」

と言って、MPもパイプたばこ詰めて喫煙しだした。一方IYは、HG達に置いて行かれていた…でも。HG達が吹かすパイプたばこの煙の香りに

「准尉…いい香りですね」

と言った。

●ナイス！バディ…何が！！

夕方、港町警察署の道場とシューティングレンジにTYの所から戻ってきたHYが練習に行くというので、MPの拳銃の試射をかねてIY・MPもついて行く。

港町警察署の受付で、HYが道場とシューティングレンジの使用許可願いをいつもの様に記入していると、受付のなじみの女性警察官のKT（彼女は、休日は白山亭でアルバイトしています）に

「ねえ、HYさん。後ろに居る外人さん誰？」

と訊ねられて、HYは

「あつ、ウチ（碓屋）の海外研修生…」

と、咄嗟に嘘をつき、紹介した。

「あら、そうなの？あなたの所、グローバルになったわねえ…」

と感心して言った。そして、MPに向かって

「海外研修生と言う事は、“特別銃器携帯・使用許可証”は？一応持っているのなら見せて、仕事なので」

と言ったので、MPの横に居るIYが説明する。それを聞いて、MPが「オー」と言って、ジャケットから、特別銃器携帯・使用許可証のD国版を提示する。それには、“国際資格”

を意味する文字がD国語で書かれていた。

ロッカールーム兼更衣室でIYとMPが荷物をロッカーに入れている横でHYが道着に着替えるのを見て、MPは銀狐に出し抜かれたのを思い出し、

「IY、ワタシ格闘技の練習したい…ダメカ？」

と聞かれ「今日は、あんたの拳銃の試射が目的なのに…」と思うが、MPの実力知るチャンスと思い。

「私は、組手（こちらの世界という空手のようなもの）が得意だけど、手合わせ願えるかしら」

とMPに言うと、MPは喜んで

「イイネ！」

「でも…あんたに合う道着あるかしら…」

知り合いの署員に頼んで男性用の道着を貸してもらった。道着の着付けに手間が掛かると思ったが、MP一人で着られたので

「…MP、体術とかの経験あるの？」

「ハイネ」

と答えた。

道場に入る時も、一礼をするなど心得はある様だ…道場に入ると、そこで練習をしていた観衆の目を引く。学校帰りに道場で練習する子供達は特に興味津々…

皆が見る中、IYとMPが手合わせをすることになった。道場の師範である警部補が審判を買って出た。

「では…はじめ！」

M Pの素早くリーチの長い突きと蹴りが繰り返される。I Yは押される…何とか懐に入ろうとするが、M Pの巨体の割に素早い動きに間合いが取れない。I Yは「(彼女、強い！…)」と思った。

I YはM Pの攻撃に防戦一方…M Pの放った後ろ回し蹴りをしゃがんで避けたので、M Pがバランスを崩した所を「(今だ！)」と思い、I Yが得意の踵落としを繰り返そうとするが、高身長の人M Pの頭上に踵が届かず、グキツ！という鈍い音共に振り向いたM Pの顔面にI Yの足の裏が当たった。

I Yの異変に気付いた審判が

「…まで！」

と言って、試合を止める。

審判の声に、2人とも動きが止まるが、I Yの足の裏はM Pの顔についたまま…M Pが「ナニスル！」と言って、顔面に張り付いたI Yの足を手で払う…I Yはその場に倒れ込んだ…

「I Y!どうしたの？」

H Yが倒れて股間を抑えているI Yの所に駆けつけると、

「…すみません…股間に痛みが…」

「…エッ？」

M Pも心配して

「I Y…どうかしたか？」

「ごめん…M Pちよつとタンマ…」

担架が持ち込まれ、I Yは医務室に運ばれた。

医務室で女医がI Yを診察して、レントゲンの画像をパソコンのモニターで見ながら、
「股関節の脱臼は無いわね…内転筋が伸びきったのかしら…そんなに足を広げる様な事したの？」

と聞かれたので、I YはM Pを指して、

「彼女の頭上に踵落としをしようとしたら、届かなくて…」

「ほほほ…」

と女医は苦笑いをした。

「暫く、ここで安静にして居なさいね」

「はい…」

I Yが医務室のベッドで安静にすることになったので、H YはI Yの敵討ちのつもりで、

「M P…わたしとやらない？」

と言ってM Pを挑発した。

「イイデシヨ」

とM Pも応じて、H Yと共に道場に戻った。

巨体のM Pと小柄なH Y…二人の体重と身長の違いの勝負に道場は静まり返った。

勝負はすぐについた…誰もが小柄のH YがM Pに捕まって投げられると思ったが、M

Pの動きよりも早く懷に飛び込んだH YがM Pを投げていた。

投げられたM Pは畳の上で仰向けになってボー然としていた。

道場は驚きの声に包まれた。

I Yがあんな事になったので、シューティングレンジでのM Pの拳銃の試射はやめて、H

YはM PにI Yを背負うように言って、母屋に帰ってきた。

三人は風呂場に行き、警察署で借りた道着とかを洗濯機に入れ、浴室に入る。I Yはまだ股間が痛いとの事で湯船に浸からず、掛け湯で道場でかいた汗を流していた。

風呂から上がり早めの夕食を取ると、H YはI Yを部屋に連れて行き、

「今日は、寝てなさい…准尉にはわたしから言っておくわ」

「すみません、H Y先輩」

今夜の女給業務は、H YとI Yであったが、I Yがあんなこと（しつこい？）になったので、H YはM Pと共に入る事にした。

「H Y入ります」

と言って、バーカウンター横の従業員入り口から入ると、

「あれ、I Yは？」

と既にバーカウンターで仕事をしているH Gが訊ねた。

「…実は…」

H Yは警察署の道場での話をした…

「…それは、大変だね…I Yは今？」

「母屋の自室で横になっています」

「そうか、今日はその方がいいな…あつ、H Mに今の事伝えてくれるかな…あれならI Yの体調がおかしくなったら対応できる」

「はい、ちょっと母屋に行ってきます」

夜の白山亭はP u b営業…ウェイトレスの女給はH Yと見習いのM Pだけ…

お客が来ていないことを良いことに、警察署でH Yに投げ飛ばされたのが余程悔しいの

か、MPがHYを子ども扱い（こう見えてもHYは40歳代です。MPは20歳代です）するので、

「ちよつと…あんたねえ！」

HYが怒って、MPに詰め寄る。MPはまたHYに投げ飛ばされるのではないかと恐れ、壁に追い詰められる。

HYが壁に追い詰めたMPに壁ドンをしようとしたが、HYの頭がMPの胸の位置にあり、壁ドンのはずが、MPの胸に阻まれて抱き着く格好になる。MPは訳が分からず、HYが抱き着いたものと勘違いし、馬鹿にしてHYの頭を抱えて胸に押し付け頭を撫でる…窒息しそうになるHY…MPの横っ腹をどついてMPがひるんだ隙に、一旦、離れた。

「MP！」

「ハイ」

「そのままそこに居て」

HYは壁を指さし、MPにそこに留まるように命じ、「なんでも大きければいいってもんじゃないんだー」と、また言って、泣いて立ち去るHY…ポカンとするMP…するとHYはHGをわざわざ呼んきて、壁ドンをするように頼み、HGも「…こうか？」と訳が分からずMPを壁ドンする。

HGの壁ドンにMPはなぜかときめいた…頬を少し赤らめたMPに、

「わたしは、子供じゃない！40代のオバサンだよ！」

そこでやっと、HYが主張したい事を言った。それを聞いたHG「（自爆したか…）」とHYに突っ込みを入れ、呆れた。

●ネエーちゃんいいモノ持つてるねえ…

HGは翌日、IYがMPとの格闘で負傷したので、大事をとり、本来碇屋で唯一、銀狐を

目撃しているIYに課すはずだった、SBの入院する病院の入り口での見張りをHYと交代してもらった。HYには、IYから銀狐を目撃した時の特徴を教えて貰い、同時に以前使用したウェアラブルグラスを持たせた。

MPは昨日できなかった、自分の拳銃の試射を、HGに申し出て、港町警察署の射撃場に連れて行ってもらった。シューティングレンジでIYに調整してもらった拳銃を撃つ。

「どうかね？MP」

「IY、ガンズミス良い腕ネ、拳銃調子いいし、よく当たる」

「そうかね」

MPは、試射した拳銃をシューティングレンジのテーブルに置くと、

「HG…ちよつと見てネ」

と言って、数歩下がった。そして、華麗なステップでターンをしながらスカートの下からショットガン（散弾銃）を抜き、片手で撃った。それを見たHGは「（あれ（ショットガン）を片手で軽々と…）」驚いた。

「それをスカートの隠しているのか…」

HGが、MPの持つポンプアクションショットガン（散弾銃）を指さして訊ねると、MPは頷いた。HGは続けて

「それって、チャリティーオークションの時も…？」

「ハイネ」

「そんないいものを持っているのに、なぜ使わなかった？」

「ショットガンをあの場合で使ったら、一般の人に迷惑かかる」

と、MPが言うと、HGは深く頷いて、

「それが正解！」

「…それにこれ、ワタシの身長を活かした隠し技ね…奥の手は滅多に出さないものヨ」

「成程…」

M Pがショットガンを撃つのを見たH G：「何か使えないかな…そうだ!」と思いつき、

「M P、店（白山亭）に帰るぞ」

「ハイネ！」

H Gは母屋の食堂でM Pに

「この弾を使いなさい。」

H GはM Pに強化ゴム弾の散弾銃用のサンプルを見せる。散弾銃用の強化ゴム弾は、発射後十字に広がった強化ゴムが飛んで行くモノや、大小の強化ゴムボールが発射されるモノ、ドングリのような形状のゴム弾が発射されるモノがある。

それを見てM P

「これなら、他の人巻き添えにしても、殺す事無いネ」

とウキウキしながら言うと、H Gが

「ショットガンの威力だと、当たり所が悪いと死ぬぞ」

呆れて、注意する

「そっか…撃つとき気を付けるヨ」

と言って、M Pは笑った。

その時、H Gのスマートフォンが着信音を鳴らす。

「はい、H Gです」

『どうもー、皇国家公安局のI Sです』

I Sの軽いノリにH Gは戸惑った。

「あつ、どうも…お世話になっております」

『こちらこそ…お世話になっております。あつ、まあ堅苦しい挨拶はここまでにして…』
銀狐の潜伏場所がみつかりまして…』

「えっ、見つかったのですか？」

『はい…見つかった事は見つかったのですが、生憎本人が留守にしています…』

それを聞いてH Gは「留守って…逃げられたのかい！」と突っ込みを入れた。

『それですね、潜伏場所でお宅に居候している赤毛の彼女の荷物が発見されましたね。潜伏先は我々と警察が現場を検証していますが、荷物は既に所轄のN M署に押収されましたので、赤毛の彼女に見て貰いたいと思ひまして…』

「ああ…成程、そういう事ですか」

『はい、N M署に行っていたければ、すぐに確認できますので…』

「分かりました、すぐに彼女を連れて行きます」

『はい、では—』

と言って、I Sは通話を切った。H GはI Sの話から公安局も、銀狐がM Pに変装すると予想しているので、銀狐がM Pの荷物からどんな物を盗まれているかM P本人に早く確認させたいのだろうと考えた。

H Gは母屋の2階の部屋で横になっているI Yを呼ぶと、

「I Y、M P」

「はい」「ハイネ」

「M Pの盗まれた荷物が見つかったそうだ。盗んだのは銀狐らしい…」

「エエッ！」

M Pが驚く。

「それで、これからM Pの荷物かどうか確認したいからN M署に来てくれとの事だ」

「エッ？ナゼ？ワタシの荷物見つかったネ、なんでワタシ確認に行く必要がある？」

と文句を言うが、

「本人が確認しないと、本当にM Pの物か確定できないし、荷物帰ってこないぞ！」

「あつ、帰ってこないダメ、行きます」

H GはI YとM Pを車に乗せて、帝都内のN M署に行った。

N M署入り口で、

「あ、H G社長、どうもN M署のT Hです」

警察署の入り口でH G達を出迎えたのは、以前I Yが銃撃されて怪我した時に事情徴収をした捜査一係の刑事であった。（巻き込まれ親父の子守唄」参照）

「あつ、これはどうも…」

H GとI Yは、既に見知っているので、軽く会釈した。

「話は上から聞いています。早速案内します」

とT H刑事は、歩き出した。

“捜査資料予備室”の札がある室内に入ると、折り畳み机の上に、キャスター付旅行鞆とその中身と思われる服とか下着とか一着毎、化粧品等小物一品毎、その他諸々等が一つ一つ丁寧に番号札を付けられ、並べられていた…それを見て「（うわー、すげーな）」と、H Gは驚く。

「ワーーオ！！」

同じく驚いたM Pが自分の荷物と直感し、興奮して突進しようとするのをI YとH Gが押さえつける。

「ワタシのモノ晒し物にされて…」

「落ち着け！MP（ホントに力が強いな…まるで牛か馬を抑えるようだ…）」

MPに引きずられそうになりながら、HGは思った。MPが落ち着いてきたのを見計らい、
「MP」

「ハイネ」

「この中から、無くなっているモノは無いか、また逆に見た事の無いモノは無いかを教えてください…但し、触っては駄目だよ」

「ワカッタ」

MPは頷くと、机の前に行き、後ろに手を回して一つ一つ見て回った…そして、

「HG！」

「なんだ？」

「ワタシの服…ブラウス・ジャケット・スカートが一着ずつと、下着ブラ・ショーツ上下とストッキング無い…それと、この下着…ワタシのじゃない!!」

と言つて、机の下着を指さした。

「…どれ？」と言つて机の下着を覗き込もうとするHGを「准尉…やめてください!」といつて、IYがHGのスーツの裾を引っ張る。TH刑事はMPが「自分のモノじゃない」と言つた下着番号札をメモしていた。

「それでは、無くなっている服の特徴を教えてくださいませんか？」

と言つて、TH刑事はMPにコスチュームのイラストが記載された本を提示した。MPはそれを受けとり、ページを捲った。

「これと似たブラウスとジャケットとスカート…」と次々に指さす。TH刑事はそのページに付箋を張り付けていく。

付箋を貼り終わると、タブレット端末を操作した。

「こんな感じですか？」

と言って、M Pが示したコスチュームを着用した成人女性のキャラクターのイラストが表示されていた。

「ハイネ」

「それでは、次にそれぞれの色を教えて下さい」

「ブラウスは…」

と言って、M PはT H刑事と会話しながらイラストのコスチュームに色を付けていく。

やがて、色が付いたイラストのキャラクターの頭髪を、M Pに似せた物と、I Yが目撃した『銀狐』と思われる、銀髪の頭髪を加えた二種類の絵が完成した。

T H刑事はイラストを複数部プリントアウトすると、その1部をH Gに渡した。

「ご協力感謝します」

「…ところで、彼女（M P）が違うと言った下着は？」

「これから鑑識に回します…多分、銀狐の指紋とか皮膚片とか色々附いているでしょうから…」

「…そう、色々…ね」

「准尉！やめてください！！」

I Yが顔を赤らめて言った。

●事件解決

H Gは即座に銀狐がM Pに変装してS Bが入院している病院に向かったと確信した。警察署でプリントしてもらったイラストをスマートフォンで撮影して、病院で待機しているH Y、T Yに送信して、自身も病院にむかった。

帝都国立総合病院…

M Pの服を着て、M Pに変装した暗殺者銀狐…M PがS Bからクビにされたことを知らない…

銀狐は、S Bの居る病院に入る。

病院の入り口で待機していたH Yがそれを見つけた。

「あれ？M P…？でも、M Pは准尉と車でこちらに向かっていると聞いているし…服の特徴が准尉からの連絡にあった服…じゃ、あれひょっとして『銀狐』？」

H YはS B警護で病室に居るT Yに連絡した。T Yのスマートフォンに、

『チェックメイトキングツ、こちらホワイトロック。ホシはL J(M P)に化けて病院に侵入した…オーバー』

と通知し、H Yは銀狐を尾行する。T YはH Yの通知を見て

「H Y先輩…遊んでいるな…(苦笑)、『L J』と言う事はM Pに変装しているのね」と言つて、苦笑した。

…ちなみに、『H R』は、主治医(女医)、『K B』は、マネージャー、『K L』は、通訳、『W T』は、特別室付看護師の暗号(笑)作者注

病院に到着する寸前にH Yからの通知を受けた、H GとI Y、M P。病院の駐車場に車を止めるとすぐにH Yの後を追う。

S Bの居る病室に入る銀狐。病室に入るなり、S Bに

「(D国語で)クビにしたのに何しに来たの…!!」

といきなり、恫喝されてその場で狼狽える。

H Gの作戦通り、模造拳銃を構えるT Y…銀狐は、T Yの右手片手で構えた模造拳銃を足

で蹴り上げ拳銃を落とす。

銀狐はMPの拳銃を構えるが、TYの持つ左手の警棒で叩き落される。

TYと銀狐の格闘中に駆けつけたHYが病室入り口で拳銃を構えるが、銀狐の背後にTYとSBが居るので、撃てない…仕方なく病室に入り、二人を拳銃の射線から外れる様に移動するが、構えた拳銃を銀狐の蹴りで払い落とされる。

2対1になり、銀狐はTYから叩き落した拳銃を拾ってターゲットのSBを撃とうと構え、すぐさま引き金を引くが、模造銃なので弾丸が発射されないどころか、引き金が引けない…慌てて銃を確認し、それが模造銃と認識すると、SBに投げつけるが、TYの警棒に叩き落される。

暗殺ができないことを悟り、体制を立て直すためにMPの拳銃を拾い、病室を出て廊下に出た銀狐。「ハイ!」と言う言葉に振り向くと、散弾銃（ショットガン）を片手で構えたMPが居た。

MPの足元で膝撃ちの姿勢で拳銃を構えるIY、その後ろに拳銃を構えるHG…SBの病室では、拳銃を構えるHYと警棒を持ったTY…

銀狐は、MPの構えたショットガンを見て「ヤバイ!バラ玉（散弾）…この場所（病院の廊下）では、病室の入り口以外には横に逃げる空間は無い、でも病室にはボディガード2人が居るのでは逃げられない!」…」と思って、咄嗟に顔を腕でカバーする。

その瞬間MPの構えたショットガンから強化ゴム弾が発射され、銀狐の右肩に命中。散弾銃から近距離で発射された強化ゴム弾の威力は拳銃弾より威力が強いので、銀狐はその場でひっくり返り、その衝撃で被っていたカツラが取れて銀髪のショートヘアの髪があらわになり、手に持った拳銃が離れる。右肩を抑えて蹲る銀狐…MPはポンプアクションのショットガンを腰だめに構えて、2発目、3発目を発射、銀狐の足を確実に狙い行動不能にする。そこをTYに抑え込まれる。

捕まった銀狐は、あとから来たI Sに引き渡された。

●こぶしで語る

その晩の事件解決の慰労会が行われた。しかし、S Bの件で夜の部のP u bが臨時休業にしていたせいで、常連客…特にI Fからは『折角、帝都から電車に乗ってわざわざ来てやっているのに、また事前連絡もなく“臨時休業”とは、何様のつもり！』（巻き込まれ親父の狙撃「参照」）と怒りのメールが送られてきていた。（昼の喫茶部は、T Tとアルバイト達で営業しています。作者注）

なので、H Gは「H Y、T Y、I Y、M Pと外でやってね…店は俺とI Aとアルバイトでやるから…」と言って、母屋から送り出された。

「どこ行く…？」

4人は港町商店街をぶらつきながら、

「二次会は、あそこの居酒屋でいいんじゃない？」

と一軒の居酒屋をH Yが指さすと、他の3人は頷く。

居酒屋に入り、席に着くと、

「いらっしやい、ご注文が決まりましたら呼んでください」

と店員が言うと、

「つまみは後から頼むから、先に生4つ頂戴！」

とH Yが言った。店員が「よろこんでー」と言って席を離れると、H Yはハタと

「M P」

「ハイネ」

「あんた、生ビールでよかったんだっけ？」

と聞いた。MPはキョトンとして

「生って、生ビールの事ネ…それなら大丈夫。でもなんで？」

「そう…よかった。いや、D国って、ビールの本場だから、『生ビールは邪道！』と言われ
そうで…」

「ダイジョブネ」

ジョッキが運ばれてきた。HYが

「今回の任務完了を祝ってカンパーイ！」

「『カンパーイ』」

と言って、グラスを合わせた。

つまみを注文し、あとは女子会のノリ…病室でのSBの事とか、HGの悪口とか…

居酒屋を出て、

「次は…」

とHYが言ったところで、MPが

「ワタシ、カラオケしたいネ！」

と提案した。

「いいわね…准尉と外で飲んでもカラオケ行くの嫌がるしね。『俺は下手だからヤダ』とか
言うし…」

とTYがMPに乗る。

「そうよね…カラオケっていうのもいいわね」
とHYも賛成した。

「…」

IYは生まれつきの難聴のため、音階がよくわからず歌が下手である。碇屋に入社してH

Gに高性能の補聴器を作って貰い、近年は歌が上手くなつては居るが…先輩達が言うので、そのままついて行く事にした。

カラオケ店内で、H Yは歌謡曲、T Yはアイドルグループの曲を歌う。I YもT Yと一緒にアイドルグループの曲を歌う。中でも目立ったのはM P…皇国のアニメソングを上手く歌いこなした。聞くと、D国に居るころからアニメオタクで、家では皇国のアニメVDを見ながら歌ってたそうだ…

他の3人はM Pの熱唱に圧倒されるが、「」（普通の会話も、アニソンの歌詞レベルで話せるといいんだけど…）」と思った。

●M P故郷に帰る

白山亭の入り口前に黒いリムジンが停車する。運転手が車を降りて後部のドアを開けると最初にB侯爵秘書、続いてS Bとそのマネージャー、更にI Mまで…それから助手席からI Sが降りて来た。

入り口のドアが開き

「いらっしやいませ」

と、K Jをいつもの様に塩対応しているI Yが応対する。

「ヤッホーI Y」

「あら、I Mいらっしやい」

と笑顔になるが、I YはI Mの後ろにB侯爵秘書とI S…おまけにS Bとそのマネージャーの姿を認め、営業スマイルに戻る。

「H G社長はいらっしやいますか？Yお嬢様」

「はい、今は店に居ませんので呼んできます。それまでこちらにどうぞ」

と言って、I Yは5人をバーカウンター席に案内する。バーカウンターに入っているT Tが対応する。

「いらつしやいませ、じきオーナーのH Gが参りますので、ご注文を」

と言って、メニューを差し出す。B 侯爵秘書がメニューを持ってS Bと話始める。

「(D 国語で) それでは、S B様。何を飲まれますか？」

「(D 国語で) なにがお勧めかしら？」

「(D 国語で) ここのお店はコーヒーが美味しいです。特に“白山亭オリジナルコーヒー”が私はお勧めです」

「(D 国語で) 確かに、このコーヒーは、以前飲みましたが美味しかったですね。では私は、白山亭オリジナルコーヒーを頼みます」

「(D 国語で) マネージャーさんはどれにしますか？」

「(D 国語で) 私も」

「I M様は何をのまれますか？」

「あたしは白山亭オリジナルコーヒーを」

「I S様は？」

「僕も白山亭オリジナルコーヒーを」

「では、白山亭オリジナルコーヒーを5人分…」

「畏まりました」

やがてH Gが身なりを正して店に入ってくる。I Sがご機嫌でカウンター席で手を上げてH Gを招き、H Gがバーカウンター内に入ると開口一番

「いやあ…H G社長。全くお見事な腕前で…」

「はて…何のことでしょう？」

「またまた―ご謙遜を…『銀狐』の事ですよ。彼女を生かして捕まえてくれたおかげで色々な証言が得られました。今、D国大使を外務省に呼んで外務大臣（F県領地出身の狸大臣の後任）と話をしているはずです」

「…そうですか、ところで今日はまた一段と華やかで…」

「S B様がM P様に謝りたいことがあるそうでした…M P様がこちらに居ると聞いています」

とB侯爵秘書が言うので、H Gは事件が解決した今、S BにM Pの事を隠す必要がないと思います。

「はい、彼女なら、そこに…おい、M P！」

「ハイネ」

入り口の付近の席でK JをからかっているM Pが振り向いて返事をする。白山亭の女給服を着て赤い髪をスカーフ（戻ってきた荷物からです。作者注）で覆っていたので、5人の誰も気づいていなかった。

「こっちにきてくれる」

「ハイネ」

M Pがバーカウンターに來ると、S BがいきなりM Pの手を取り

「（D国語で）ごめんなさいね、あんなひどい事言つて」

と言つて頭を下げた。M PはS Bが自分をクビにしたことと、M Pの顔を見たくないと言つた事を思い出した。M PはS Bに

「（D国語で）今更何を…」

と冷たく言うと、

「（D国語で）あなたが怒っているのも無理はないわ…あなたが私の謝罪を受け入れるかは、私の話を聞いてからにして欲しいの」

「(D国語で) わかったわ…その話とやらを聞かせて頂戴」

S Bは銀狐に襲われて即M Pをクビにした理由を説明する…それは、前任のボディガード(女性)がS Bを庇いきれずにS Bが銀狐にやられて怪我をして入院した時、銀狐がそのボディガードの彼女に化けてS Bの命を狙う可能性があるのです、彼女が一計を案じて彼女がS Bの芸能事務所社長と共にS Bが居る病室に見舞いに行き、銀狐がボディガードの彼女が見舞いを終え、病室を出た後に、忘れ物を取りに来た彼女に成りすまして病室に入り、S Bを殺害するだろうと考え、彼女は病室に居たS Bのマネージャー(女性)に自身のジャケットを着せて、彼女に成りすまして社長と共に病室から出し、彼女自身は病室に残り銀狐の襲撃に備えた。その彼女の機転で銀狐の凶弾からS Bを庇うが、本人はS Bの身代わりとなり死亡したと言う経緯によるものだったと。

銀狐が捕まった今では、銀狐に襲われる事がないので、M Pに対してS Bが謝罪をした。更に、S BからM Pの居た会社と話をしたが、既にS Bの事務所から莫大な違約金を請求しているので、M Pのクビについては取り消してもらえなかった。

S BがM Pの居た会社に対する賠償金から、M Pの飛行機代を捻出して、S BとM PはD国に帰れるとの事。M Pはそれを聞いて、S Bの謝罪を受け入れ、S Bと抱き合った。

以上のS BとM Pとの間の話をB侯爵秘書がH G達に通訳した。

B侯爵秘書が流暢にD国語を話すのを見て、H GはI Yに聞くと

「あの人、D国の帰国子女でして…実家(I Yの実家はB侯爵邸)では、私のD国語の家庭教師でした…」

と、I Yが暗い表情で話す。そして

「D国語でまくしたてられるので、ここ(I Yが自分の左耳を指して(I Yは左耳が生まれ

つき難聴です。作者注）のせいにして聞こえないふりをよくしていました…すると、彼女は筆談に持ち込む戦法に代えたので、私はD国語の会話より読み書きが上達しました…」
と言つて、IYは苦笑した。「それで、B侯爵自身が居なくても秘書を見て委縮するのか…」とHGは理解した。

●やっぱ、助っ人は外人粹だね

MPがSBとD国に帰国して数か月後…

白山亭では、何事もない日常が続いていた。ただ、IYだけは沈んでいた

今日も、入り口のレジ付近でため息をつくIY…HYが見かねて

「IY…また、ため息ついて」

「すみませんHY先輩」

「また、MPの事思い出していたの？」

「はい…」

「何だかんだ言っても、いいコンビだったのね…」

「違います！私は彼女が国に帰って、せいせいしています」

弁明するIYにHYはIYの顔を覗き込むように、

「どーだか」

「ホントですったら！」

赤面して否定するIY…HYはそれを見て笑っていた。

「それにしても、あの娘（MP）どうしてるかしら…あの娘がここに居た時はまるで馬か牛が暴れまわっているみたいだったわね」

「HY先輩…『馬か牛』と言うのは言い過ぎでは？」

と言っている、入り口のドアが開き、2人は反射的に

「いらつしやいませ」

と、応対した。しかし…ドアを開けたのはK Jだったので「(げえ…K J…)」とI Yはゲンナリする。H Yは「わたしのお客様ではないわ…ヨロシクI Y」と言っ、その場を離れようとする。

「やっ…やあ！」

白山亭の入り口を開けたら、いきなりI Yが応対したので、K Jは「今日は、ついてる！」と嬉しくなった…その途端、

「ハイ…K J邪魔ネ」

と言っ、大柄な女性がK Jを店内に押し込む。K Jは驚いて「貴様！こゝむ…じゃなくて何をす…ゲッ！MP…」

K Jが『MP』と言ったので、I YとH Yが驚く。2人を見ると確かにそこにMPが居た。

「ハイ！」

手を挙げて、H Y達に挨拶するMPに、

「MP！」「MP…あんたどうしたの？」

と聞くと、MPはニヤツと笑っ、

「ワタシ、向ここの会社辞めたよ…で、こっちの会社入る」

「「エッ、エー」」

とH Y、I Y…更にK Jまで驚く。K Jは以前MPにからかわれていたの「(また厄介なのが来た…)」と思っ、

MPはずかずかとH Gの居るバーカウンターまで進むと、

「ハイ、H G！」

「よう…MPどうした？」

「ワタシ、D国の会社正式に辞めてきたヨ。だから碓屋に入社したいね。ダメカ？」

「ふーん、一旦クビになった会社に復職するのもなんだからなあ…で、こつち（皇国）来たの…それで我が社に入りたいと…」

「ハイネ」

「うーん」

HGは腕を組んで天井を見上げた。

「シャツチョーサン…おねがいね」

と言って、MPが手を合わせる。

「…あんたまたわざと言ってるでしょ！」

「アハハ！またばれたか」

IYの突っ込みに照れ笑いするMP…2人を見て「（また…賑やかになりますね…准尉）」とHYは思うが、当のHGが腕を組んで一向に天井を向いたまま…それを見て「（あれ？いつもなら、ここで准尉が『めんどくせー』と言うのに…今回は言わないなんて…珍しい）」とHYが驚く。

「入社じゃなくて、俺に弟子入りな！」

とHGが言うと、MPは喜んで、

「ハイネ、それでいい！」

●ヤバイ事になった

数日後、白山亭の入り口前に黒いリムジンが停車する。運転手が車を降りて後部のドアを開けると最初にB侯爵秘書、続いてBK、それから助手席からISが降りて来た。

相変わらず、I Y 目的で入り口の側の席に陣取っているK J「ここ…駐停車禁止なんだけど…」と職業柄独り言をいうが、黒いリムジンの持ち主が好きなI Yの実家の車であるので、何も言えず…。

「いらつしやいませ」

K Jをいつもの様に塩対応しているI Yが応対する。

「姉上様」

B Kが女給姿のI Yに無邪気に抱き着く。I Yは妹を優しく受け止める。後ろに父親のB 侯爵の姿を探す今日は居ないようだ。B 侯爵秘書が

「H G社長はいらつしやいますか？…Yお嬢様」

「はい、今は店に居ませんので呼んできます。それまでこちらにどうぞ」

と言って、I Yは3人をバーカウンター席に案内する。バーカウンターに入っているT Tが応対する。

「いらつしやいませ、じきオーナーのH Gが参りますので、ご注文を」
と言って、メニューを差し出す。

「それでは、Kお嬢様。何を飲まれますか？」

「私は、白山亭オリジナルコーヒーを頼みます」

「はい、では私も…I S様は？」

「僕も白山亭オリジナルコーヒーを」

「畏まりました」

やがてH Gが身なりを正して店に入ってくる。I Sがご機嫌でカウンター席で手を上げてH Gを招き、H Gが「（また何かあるな…）」と思いつつ、バーカウンター内に入ると開口

一番

「今日は、赤い髪の彼女について…」

「ほう？MPがなにか」

「はい…この度の事があり、我々皇国国家公安局としては、あなた方碓屋に対して、当局の外郭団体として契約していただきたく…そのため、赤い髪の彼女は、彼女の母国のエージェント機関DSFに所属から碓屋に正式に移籍と言う事になり、ビザもワーキングから、ビジネスに変更されます」

「へっ？彼女（MP）は自主的に退職して、当社に入社したのでは？」

HGが慌てると、ISは平然として、

「D国大使とD国国家公安局は、今回のSBさんの件で、御社（碓屋）を高く評価しています…なので、“銀狐”の身柄と交換にD国エージェント機関DSFは、彼女の解雇を撤回し、彼女を復職した上で、御社に出向の形で移籍する方向で検討する事にしたそうです。D国のエージェント機関DSFの情報網とノウハウはわが国でも見習う必要があります…御社はそこと対等に付き合えるのですよ。ですので、我々としても是非とも外郭団体として契約をお願いしたい」

「なんてこったー、めんどくせー」

と言って、HGは頭を抱える。それを聞いて「(ここで言うか…)」と驚くHY

「追って、D国のエージェント機関DSFと我々当局からの正式な契約書類が来ると思います」

とISはシレっと言った。

HGは「(もう、どーにでもなれ)」と気を取り直して、

「…で、銀狐の着用していたとみられる下着は…？」

「勿論、銀狐の持ち物とDNA鑑定で判別しました…」

「准尉！やめてください！」

I Yが口を挟む。そんなことお構いなしに、

「でも、なんで下着まで…？」

「どーしてでしょうねー？こちらが聞きたいくらいでして…ハハ」

と言って、I SとH Gが笑うが、I YとB侯爵秘書は、冷たい視線を二人に送っていた。B

Kは、初めから話の意味が分からないので、コーヒーを飲んでいた。

I S達が帰った後…H Gは事態の急展開についていけなくなった。

「准尉…国家公安局の外郭団体と言う事ですが…私は准尉の気が進まないのなら、無理に契約する必要はないと思います」

バーカウンターで頭を抱えているH Gの肩にT Tが優しく手を添える。H GはT Tを振り仰いで、

「お前さんは、優しいな…なんでもお見通しだなT T…」

とH Gが言うと、T Tが

「准尉が弱気なのは珍しいですから…」

「俺は、あのF県領地事件後、H YとI Yが俺の弟子になると言い出した時に、どうやって娘2人抱えて食べさせていくかをまず考えた。本来の願望であるガンスミスを仕事にする事を考えたが、それだけでは食べていけない、そこで祖母から貰ったこの白山亭を再建する事にしたが、あの娘達を白山亭の女給だけで養うのは…才能と実力があるだけに可哀想だと思って、エージェント会社を起こしてみたが、この前のI Yが撃たれた時から娘達をこれ以上危ない仕事に就かせていいものか考えるようになった…それで、この度M Pの入社と国家公安局の外郭団体の話と、D国のエージェント機関D S Fとの提携の話が一度に来たので、正直弱っている」

「…正直に吐露していただき、私は嬉しいです。准尉が儲け主義ではなく、あの娘達の事を第一に考えてくれているのが私は嬉しいです…だから、私は准尉について行こうと決めたんですよ…F県領地事件の時に再会してから」

「ありがとう…TT」

とHGが言うと、TTは優しくほほ笑んだ。

白山亭夜の部でHGがバーカウンターでグラスを磨いていると、急に後ろから何かが抱き着いた。HGが振り返るが、何も見えない…HGは「ここ（白山亭）に居る誰かの霊の悪戯か？」と思ったが、下を見ると人間の手が見えた。一瞬驚くHGだが、

「おい、HY脅かすな」

と言うと、HGの背中から、

「准尉の事を心配しているは、TTだけじゃありませんよ」

とHYが言った。

HGは「やれやれ…娘どもにも心配されてしまったか…」とHYの心使いを有難く思った。

「…なぜ、『お前達はどうしたい？』と聞かないのですか？いつもなら、皆を集めて話し合いをするのに…」

とのHYの問いに、HGは上を向いて、

「そうだな…そうしたいが、俺はまずお前さん達がどうやったら危ない目に合わずに済むか、昼間の話ではその見通しがつかないから、こうして悩んでいる」

『めんどくせー』と言ったのにですか？」

「…うん、あの『めんどくせー』は、本当に何もかも面倒になったから言った…もうどうにでもなれ…」

と言うH Gに、H Yは驚いて、

「珍しい」

●事業拡大か現状維持か

翌日、幸いにも定休日なので、T Tにわざわざ来てもらい、白山亭内で臨時会議。

今回は話が大きいので、H Y達の他にS Kと経理のK Mも交えた。

「みんな、定休日なのにわざわざ集まってもらい、すまない…実は、国家公安局から外郭団体の提携の話と、D 国のエージェント機関D S Fとの提携の話しが一度に来た」

「オー」

元D 国のエージェント機関D S F要員のM Pが驚く。K Mは

「提携する事で、何か良いことあるの？」

「実入りの件は、契約書が来ていないので、何とも言えないけど…」

「どっちが？」

今度はS Kが発言した。S Kの発言に対してH Gが

「『ぶっっ』っっっ」

と訊ねると。

「D 国のエージェント機関D S Fと国家公安局だよ。この場合分けて考えられないのか？」

S Kの言葉にH Gはハタと気が付き、

「…そうだった…S Kありがとうよ…D 国のエージェント機関D S Fと提携すれば、国家公安局が外郭団体として契約したがるが、逆にD 国のエージェント機関D S Fと提携しなければ、国家公安局とも外郭団体として契約の話はチャラになる…と思う」

「ほれみろ…珍しいなH Gともあろうものが…」

S Kは腕組みして言った。H Gは頭を掻いた…

「そうすると…D国のエージェント機関DSFとの契約が先ね…海外資本と契約して大丈夫なの？HG」

KMが心配顔でHGに訊ねた。

「そこが問題！…俺は海外資本の手先になる気はしないが、この話を持ってきた国家公安局の話では対等契約と言うのが、断るのに二の足を踏んでいる所だ」

とHGが言うと、SKが

「対等だろうが、何だろうが、海外資本との提携には俺は反対だ！当然、国家公安局との話も怪しい…俺もお前も、訳が分からんことでお嬢達を危険に晒すのは嫌だと思うがどうだ？」

「うっ、うん…その点については同感だ」

「准尉！私達は別に構わないですよ、海外資本の元に働いても」

と、HYが言う。

「…それで、大儲けできたとしてもね…お前達が危険な目に合うのなら、俺は嫌だな」とHGは言った。そして、

「KM…今までのエージェント業務のみでの業績は？ここで皆に報告してくれないか？」

「いいわよ、碓屋のエージェント業務だけの営業利益は、黒字ね…主要顧客は皇王家、芸能事務所○×エージェンシー、港町商店街、Y市銃砲試験場、Y市役所鳥獣駆除係、港町シューティングセンター…」

「碓屋全体では？」

「今言ったエージェント業務の他にガンスミス業務とかを合わせると、経営全体の利益は少し黒字ね…主要顧客は港町警察署、港町水上警察署、B県領地警機動隊とBSAT、Y市銃砲試験場、Y市役所鳥獣駆除係、港町シューティングセンター…あと非公式に葛葉組…但し、この場合、ガンスミスの工作機械類の減価償却とか、部品・部材購入費とかの設備・在

庫費用が入るけどね…あと、今のエージェント達は皆H Gの弟子扱いだから、人件費は飲食代と光熱費のみ発生（残りの経費は、依頼元に請求しています。作者注）してるけど、給料制にしたら多分大赤字よ」

「ありがとうK M…と言う訳だ。碓屋全体の経営が苦しいから、提携の話を断ろうかどうかを俺は悩んでいるんだ」

「でもよ、D国のエージェント機関D S Fと提携して、あつちの皇国出張所とか出張機関になるのには俺は反対！」

S KはH Gの話を突っぱねた。

「私も反対します」

とI Yが言うと、

「わたしも反対です」

T YもI Yに同調する。I Aはオロオロし、M PとH Yは黙っていた。

H Gは全体を見回して、

「…成程、碓屋ガンスミスの共同経営者としてS Kは反対か…」

「そうだ」

「I YとT Yの反対理由は？」

「軍曹（S K）の言う出張先機関とか出張所の話になるのであれば反対です」

とT Yが言うと、I Yは暫く沈黙してから

「私は…これ以上エージェント業務が増える事に問題があると思います」

「ほう？どうして」

H GがI Yの発言に驚き、訊ねた。

「この度の事（S B暗殺未遂事件）や、以前の事件がある度に思うのですが、今までの芸能事務所や皇王家の警護任務だけだと、私やT Y先輩みたいに一人で任務を遂行できます

が、ひとたび事件に発展すると、一人のエージェントでは手が負えず、ここに居る他のエージェントが准尉の指揮下で動いて成功に導いています…特に私の妹の件（B侯爵令嬢襲撃事件「巻き込まれ親父の子守唄」参照）では、私が撃たれて入院し、HY先輩に迷惑をかけてしまいましたし、この度の事件でも私が…その…股を痛めて、またHY先輩に迷惑かけています。このままエージェントの人数が増えなければ、いくら仕事が増えても対応しきれないし、事件に発展すれば、今はなにより准尉の知恵を借りなければいけません。事件が同時多発すれば、准尉の知恵を借りる事ができないリスクがあり、破綻してしまいます。また、エージェントの数が増えたらいいと言う訳ではなく、今度は准尉の目が届かなくなり、これも破綻します。今回はMPという強力な戦力が加わりましたが、そもそもこの先、新しいエージェントを調達できる当てがあるのでしょうか？それとも、新たなエージェントを教育・訓練する余裕があるのでしょうか？」

とIYは言い切って、その場にある水を一口飲んだ。

IYの演説に誰しも息を飲んだ…静まり返る白山亭…しばらくして拍手音が鳴る…拍手をしたのは、HY…続いてTT。

「確かに、今のわたし達エージェントだけでは、事件になったらそれを解決できない…准尉頼みね」

とHYが言う

「新しいエージェントを雇うにしても、新しく入ったMP以外は今の様に前の会社で准尉の教育・訓練を受けたと言う共通点とお互い気心が知れた…特に准尉が認めた人材を得られるとは限らないし、また新たな人材を入れて教育・訓練しても、今のチームワークを保つことは難しくなるかもね」

とTTが続けた。それを聞いたHG

「成程…俺頼みか…、人も増える当てもなければ、増やす余裕も無いか…まるで大昔の群雄

割拠時代の軍師みたいだな…」

と言つて、H Gが笑うと

「いいえ…違います!」

とH Yが否定する。H Gは驚いて

「じゃあ、なんだ?」

「〃親父〃です! 准尉はわたし達エージェントの親父です。だから、わたし達娘は皆親父を信頼して指揮に従うのです…そして親父の考えを理解してそれぞれが自分で考え自己責任で動くのです…そんな娘がすぐに増えるとはわたしは思いません」

「オー、オヤジ…父親ではなくて、パパネ…ワタシH Gにオヤジ感じた。だから碇屋入りに来たネ」

とM Pが言つた。

H Yの言葉をきいて、I Yは「あつ、准尉の本棚から借りた童話…(「巻き込まれ親父の子守唄」参照) 私達はまだ准尉から学んでいる最中なんだ!」と感じた。

「…親父か…なんかお前ら教え子の娘達に言われるのは久しぶりだな!」

「「はい」」

H Yをはじめ、T Y、I Y、I A更にT Tまで返事をした。

それを聞いてH Gは

「他に意見はあるか?」

と全員の顔を一通り見ると、皆無回答…

「あー、しちめんどくせー! 俺は決めたぞ、今回のD国のエージェント機関D S Fと提携すれば、碇屋を大きくできるし、国家公安局と提携すれば、仕事が安定すると考えたが、今の娘どものチームワークと俺の頭脳労働頼りの現状ではムリ!…従つて、この件は丁重に

お断りする」

それを聞いたT T、T Yは「(アッ出た！准尉の『めんどくせー』…にしては何かおかしい…)」と思った。I Y・I AとM P、それにK Mは首を傾げた。

この中で唯一だろうと思われるH Gの『しちめんどくせー』を知っているH Yだけは、不安になった。S KはH Gの言葉にニヤケた…H YはS Kを見て「(軍曹も何か知ってそう…)」と感じた。

「…但し」

とH Gが続ける。

「「ただし？」」

H Gの言葉に皆驚く、

「但し、今後俺並みの知識・技能を持った人材を獲得出来たら、改めて提携をこちらから持ちかける…そうすれば、俺は一戦から退いて新たなエージェントの育成に専念する！もしくは娘どもの誰かが成長して、俺並みになれば同じくだ」

それを聞いたH Yは「(これだ…『しちめんどくせー』の正体は…准尉はわたし達が早く成長するのを望んでいる)」と感じた。H Yが周りを見回すと、I Yも深刻そうな顔をしていた…多分、I YもH Gの意図が理解できたのだろうと思った。

●案ずるより産むが易し

数日後、I SがB侯爵秘書と一人の金髪女性を連れて白山亭に現れた…今日はB侯爵家のリムジンではなく、別のD国製の車で…

「いらっしやいませ」

K Jをいつもの様に塩対応しているI Yが応対する。

「どうも…H G社長はいらっしやいますかな？」

今日はI Sが訊ねる。

「はい、今は店に居ませんので呼んできます。それまでこちらにどうぞ」

と言って、I Yは3人をバーカウンター席に案内する。バーカウンターに入っているT Tが応対する。

「いらつしやいませ、じきオーナーのH Gが参りますので、ご注文を」

いつもの様に言って、メニューを差し出す。B 侯爵秘書がメニューを持って隣に座った金髪女性と話始める。T Tは「(この人が居るってことは、またD 国語かなあ...)」と知っているが、

「何を飲まれますか？」

「なにがお勧めかしら？」

とB 侯爵秘書の言葉に金髪女性が丁寧な皇国語で応じた。T Tが「(あれ?)」と思う。

「ここのお店はコーヒーが美味しいですよ。特に“白山亭オリジナルコーヒー”は、S B 様も喜んでいました、私もお勧めします」

「では私は、白山亭オリジナルコーヒーをお願いします」

「私も白山亭オリジナルコーヒーを…I S 様は？」

「僕も白山亭オリジナルコーヒーを」

「畏まりました」

やがてH Gが身なりを正して店に入ってくる。I Sがまたカウンター席で手を上げてH Gを招く、H Gは「(来たか...)」と思いつつ、バーカウンター内に入る。

「今日は、どの様なご用件で…」

H GはI Sが来店した目的は分かっているが、しらばっくれて言った。

「いやいやいや…ご冗談を…H G 社長…分かり切っているくせに！」

I SはH Gの前で手を振りながら言った。

「例のD国エージェント機関のD S Fとの契約の件ですか？」

H Gはすまして言う。

「はい…そのご様子では、もう決心がついているようですね…」

「はい、我々はD国エージェント機関D S Fとは契約しません！」

とH Gがキツパリ言うのと、

「そーですか…何だって！」

と言ってI Sは席を滑り落ち驚くが、次の瞬間…席に座ると、

「…なんて…そう言うと思いました。ですので、D国エージェント機関D S Fとの契約は御社ではなくて、我々皇国国家公安局と契約する事になりました」

とI Sはシレつと言った。それを見てH Gは「(くえん男だ…)」と思った。

「では、M P…彼女の件は？」

とH Gが訊ねると

「彼女の立場は保証します。幸い、彼女の曾祖母からの難民申請を受理していますので、この国での永住権が認められているのを確認しました。それは曾孫のM Pさんにも適用されています」

「そうですか…それはよかったです。M Pが一々帝都のD国大使館に行かなくて済むので…」

と言ってH Gは「(あらかじめ、知ってたな…)」と勘繰った。

「D国エージェント機関D S Fとの契約がないなら、そちら様(皇国国家公安局)との外郭団体契約の話はなくなりますかな？」

「無論…そうなりますかな…しかし…」

I Sの掛けている丸メガネが鈍く光る。

「しかし？」

「御社と我々の関係は是非とも続けたい…我々も御社のような人材…とりわけH G社長の様な技量・知識・経験を持った人材が不足していますので、我々が必要に応じて碇屋に正式に仕事を依頼すると言う事ではどうでしょうか？」

「…成程…、当社にとっては顧客先が増えると言う事ですか」

「そうです」

と言つて、I Sは笑った。

「それならば…」

H Gが安堵の息を漏らすと、

「まあ、契約がなくとも、私はこのコーヒーが気に入ったので、たまに飲みに来ますよ」

「コーヒーのお客様なら歓迎いたします…それならば、そちらのお方は？」

と言つて、H Gが隣に座っている金髪の女性について訊ねると、I Sは彼女の方に向いて、

「ああ、紹介を忘れていました…彼女はD国エージェント機関D S FのD国大使館勤務のM Zさんです」

「初めまして、H G社長…お会いできて光栄です。私はD国大使館詰めのエージェント機関D S FのM Zです。どうぞよろしくお願いいたします」

と言つて、M ZはH Gに握手を求めた。H GもM Zの握手に応じた。

「私が今日、ここに来た理由は、一つ目はH G社長が我々と契約を結ぶと言われた時の契約書の説明要員としてですが…その役目はなくなりました…二つ目はI S様がこのコーヒーを絶賛していましたので、いただきに参りました」

H GはM Zの話に「(流暢に皇国語を話すな…M Pと大違いだ！)」と驚いた。

「はは、そうでしたか…当店が自信をもってお勧めする、私の曾祖母の編み出したコーヒー豆の配合比を忠実に守った、創業以来100年続くコーヒーを是非味わってください」

とHGは笑顔で言った。それを横で見ていたTT「(流石、創業者の曾孫…説明がキッチンと
してる…今度真似しようっと)」

「「えっ？そうなんですか？」」

ISとMZが驚く

その時、

「MP…入ります (丁半賭博で言うような口調で)」

と言って、MPが店内に入って来た。そして、MZを見るなり指さし、

「オー、MZアンタ何しにキタ」

「あらあ、MPお久しぶり…私はHG社長に会いに来たのよ…美味しいコーヒーが飲める
と言うので」

MZが高飛車にMPを煽るように言う。

「HG！このオンナ危ない、追い出すネ」

「何だと？」

「MZ、MPと皇国の学校同級生…それと、元会社の同僚」

「あらあら…この国の言葉キッチンと話せない貴女と同じ大学の同期だなんて…やめて、恥
ずかしいわ…」

「ムキーンッ！」

途端に、MPの顔が紅潮する。

MPとMZの会話を見て、「(なんで、同じ大学でこんなに皇国語のレベルに差が出るん
だ?)」とHGは不思議に思った。

HGはMPとMZとのやり取りを他所に、ISに対して、

「あの一、ISさん」

「はい？」

「M Zさんが、皇国語が達者なのに、B 侯爵秘書がこの場におられるのは…？」

とH Gが訊ねると、B 侯爵秘書が

「はい、それは私が話します…、M Z様は皇国語が流暢に話せますが、契約書類に記載されている皇国語に自信がおりにならないそうで、D 国大使館を通じ、私に同行の依頼がありました…もつとも、私はD 国大使館持ちで白山亭オリジナルコーヒーを飲めるので、自ら進んで参りましたけど…」

とシレつと言った。

「はあ…成程」

H Gはおろか、I Sも納得した。

I S達が帰った後…バーカウンター内に崩れ落ちるH G…T Tが慌ててH Gを抱き起す。

I YとM PもH Gを心配する。

「お疲れ様でした…社長…」

「…疲れた…」

T TがH Gを優しく介抱する。

「准尉！ありがとうございます…」

I Yが涙目で言う。

その晩、T Tも残ってH Gからの話を聞く。

「皆、先日の話し合いで決めたように、本日D 国エージェント機関D S Fと契約と国家公安局との外郭団体契約の件は断った」

「『オオっ』」

「なので、碓屋の営業は今まで通り…いや、顧客に国家公安局が加わったが…」

「ハハッ」

「皆のお陰で、我が社は今まで通りだ…俺一人悩んでいたらこうはいかなかった…本当に感謝するありがとう！」

H Gが話終わると皆口々に感謝と称賛の言葉を言った。

●エピソード

日常に戻った白山亭…

「こんにちは」

「いらつしやいませ…あら、I F隊長」

応対に出たH Yが夜ではなく、昼間に来店したI Fを見て驚く。

「もう『隊長』じゃないわよ。会社辞めたわ…定年で」

「そうなんですか！」

「H G居る？」

「はい、今は店に居ませんので呼んできます。それまでこちらにどうぞ」

と言って、H YはI Fをバーカウンター席に案内する。バーカウンターに入っているT Tが応対する。

「あら、I F隊長…」

「もう『隊長』じゃないのよ…辞めたの…定年でね…」

I Fが笑いながら言う。

「そうですか、じきオーナーのH Gが参りますので、ご注文を」といつもの様に言って、メニューを差し出す。

「じゃ、白山亭オリジナルコーヒー」

「畏まりました」

やがてH Gが身なりを正して店に入りバーカウンター内に入る。

「…おや、珍しい…こんな明るい内に…今の時間お酒は出さないぞ」
といつになく塩対応…

「別にいいじゃない…コーヒー飲みに来ても」

「そう…ご注文は？」

「もうしたわよ！」

「お待たせしましたー」

H GとI Fが喧嘩（夫婦漫才のまくらですが…作者（笑）を始めそうになったので、T Tが割って入る。

それを見ていたH Y「（いつもの夫婦漫才とは違うような…そうか…准尉はI F隊長が定年退職したのを知っているのね…でも、なんで？）」「と首を傾げた。

コーヒーを飲むI F…その間重苦しい空気が店内に漂う。

やがて、I Fはコーヒーを飲み終わると、

「ごちそうさま…美味しかったわ」

と言って、レシートを持って立ち上がろうとすると、

「待てよ！」

とH Gが言った。

「なに？」

「なんか俺に言うことがあるじゃないの…と思ってよ」

「あら…」

と言って、I Fは席に座り直す。

「あんたは、もう分かってるんでしょ…私が定年退職したの」

「そりゃ、おめでとーF子ちゃん！」

深刻そうに言うI FにH Gがわざとふざけて

「なにが『おめでとーF子ちゃん！』よ！…それにF子ちゃん言うな！！」

I FがH Gを睨んだ。

「めでたく定年退職したんだろ？そんなに凄んでも、もう拳銃持っていないから俺に向けられないな」

ますますI Fを挑発するH G…HYとTTは「(マズイ！)」と思った。

「…そうね、退職したから拳銃をもうあんたに向けられないわね…」

I Fの声のトーンが急に下がる。「(アレ？)」

それを機にH Gの態度が優しくなる。

「お疲れさまでした…やっと日和見保身内密主義の上層部から解放されたね」

「…そうね」

「で、これからどうするの？」

「父が一昨年から体調悪いのは知ってるわね…定年前に何度か会社辞めて帰ろうかと思っただけ、今日までもつてくれたから、定年延長の話を断ったの。一旦、実家に帰るわ…父の事が心配だし…」

「…そうだったね…何度かメールで相談されたので、心配していたんだ」

「(オヤッ？)」

「だからね、今日はお別れを言いに来たの…今までありがとうって…」

「(アレ？)」

「…まったく！素直じゃないね…お互いに」

「…そうね…フフツ」

「落ち着いたら、連絡でもくれ。それからこつちや帝都に来ることがあったら、必ず寄りな」

「うん、ありがとう」

「(アレレ…？もしかしてこれも夫婦漫才？それも最終回？コンビ解消(笑))」

I Fがレジで会計を済ませて出て行くと、

「あーあ、とうとう完全にフラれたな…」

と言つてH GはI Fの後姿を見送っていた。それを聞いたT TとH Y「(なんだって、准尉ってまだI F隊長に未練があつたんだ!)」と驚いた。

「准尉！」

「なんだ？」

「准尉にはまだわたし達がいすよ」

とH Yが言つた。

後日、I Fから巨大な荷物というか貨物が送られてきた…着払いで…(笑)

荷の中身は大きな酒樽と角樽3個…中に入っている手紙には『弟が作った醸造酒を送ります…有難く飲みなさい』と書かれていた。それを見たH G「なにを言いやがる(笑)」

なんとか白山亭店内に運び込むと、H Gは腕を組んで「さて…どうするべえ…」と困り顔…そこに、

「こんにちはー」

「いらっしやいませ…あらY M」

「こんにちはーT T」

と言って、オバハンの挨拶を交わす。TTはYMの背後を見て、

「あら…この人達ひよつとして？」

「はい…ウチの主人と子供達よ」

「あら、いらつしやいませ…白山亭に…社長！YMがご家族といらつしやいましたー」

TTの言葉に奥のステージ付近でIFからの酒樽の前で腕組みしていたHGが振り向いて、

「よう、いらつしやい…YM」

「先輩！久しぶりです」

「お前さんも、定年（IFとYMは同年）だったな」

「はい…ですので退職の手続きをするため、帝都に来るついでに家族旅行することにしまして、寄らせていただきました」

「…すると、後ろの方は？」

「初めまして、YMの夫のYEです。妻が色々お世話になりました」

「いやあ、こちらこそ初めまして、ようこそ白山亭へ」

と言って、HGはテーブル席にYM一家を案内する。

「なににいたしましたでしょうか？」

TTがメニューを差し出す。4人供オリジナルコーヒーとミックスサンドウィッチそれと、軽食を注文した。

「先輩…あれなんですか？」

YMが奥のステージの前に置いてある存在感が大きい樽を指してHGに訊ねる。

「F子ちゃんが送り付けてきたお酒…」

「えっ？」

「F子ちゃんも先日定年退職して、実家に帰ったんだ…実家が有名な造り酒屋でね」

「そうなんです。I F隊長が先日定年退職された事は連絡受けましたが…」

それを聞いてH Gは「(本当に女子のコミュニティー…半端ねえ)」と思った。

「飲んでく？醸造酒だそうだ」

「醸造酒？ホントに？」

Y Mは飲む気満々だったが、Y Mの亭主は眉をひそめた。H Gはハタと

「旦那さんは、醸造酒ダメですか？やはり蒸留酒の方が好みで？」

と言うと、申し訳なさそうに

「はい」

と答えた。

H GがF県領地の大学に居た頃、下宿で地元の人達が『醸造酒？そんな生臭いモノ飲めるか！』と言っていたことを思い出した。

「でも、いけるクチですよ」

とH Gが再度言うのと、

「ハイ…妻の同僚のプレゼントですので、折角ですから…」

と遠慮しがちに答えた。

「そう来なくっちゃ！」

H Gは角樽の樽をぐい飲みに入れてY MとY Mの亭主に出した。Y Mは一口含むと

「あら…フルーティーで優しい口当たり…」

「…ほんとだ」

「二人とも喜んでいただけてF子ちゃんもさぞかし喜ぶでしょう…」

とH Gは嬉しそうに言った。それを聞いたY Mの亭主は、妻に

「『F子ちゃん』とは？」

「あなた、H G先輩の元カノよ」

「そうか…」

H GがY Mとその亭主を見ると、もう朱が差していた…不思議に思ったH G…「あっ！」
と言って、角樽のラベルを見ると「生酒…開封後はすぐに飲み切って下さい」と記載してあった。

「おいTT！」

「はい」

「二人に水をお出しして！これ（酒）生酒だ！火入れしていないから、すぐに酔うぞ！それから足が早い！！」

「はい！」

「（F子ちゃん、とんでもねえのを送ってきやがった！）」

●おまけ…碇屋異種格闘戦

港町警察署でトレーニングをして汗を流したH Y、I Y、M P達…母屋に帰り、風呂に浸かりさっぱりしてから、夜の白山亭の仕事に入る前に夕食をとっている時に

「ワタシら、週3日のペースでトレーニングしてるけど、H Gのトレーニング見た事無いネ」

「…そうね、准尉のトレーニング姿見た事ないわね。それでもI F隊長に拳銃突き付けられ
ても、あのような護身術（「巻き込まれ親父の反撃」参照）できるのが不思議ね」

M Pの疑問にI Yも応じる。

「…あら、准尉は毎日欠かさずトレーニングしてるわよ、そこの庭で…あなたが寝ている時にね」

「「エッ」」

H Yがシレつと言うと、I YとM Pが驚く。（ちなみに、I YはH Yと同室。M Pは一人部屋です。作者注）

白山亭の夜の部（昼の喫茶部からP u bになります）の営業も終わり、夕食時のH Yの言葉が信じられないI YとM Pは、まだ起きているT YとI Aに訊ねた。

「准尉って、体力維持にトレーニングしてるって、H Y先輩が言っていますけど、ホントですか？」

I Yの質問にキョトンとした表情のT YとI A：顔を見合わせて

「うん、してるわよ…そこ（母屋の庭を指して）でね。朝早くだけど…」

「T Y先輩は何で知っているんですか？」

「わたしも、朝に庭で木刀や棒の素振りするから…たまに相手してもらうけどね」

「T Y先輩が？…それで強いんですか？准尉は」

I YはT Yが木刀とか棒とかの得物を得意としていて、得物を持ったT Yには勝てないので、H Gの実力を知る基準になると思った。

「そうねえ…稀に本格的に手合わせしてくれるけど、私が負けるわねえ…」

とT Yが言うと、隣に居るI Aが頷く。そこに、H Yも「何の話？」と入ってくる。

「いや…T Y先輩と准尉が得物で戦って、T Y先輩が負けているって言うので…」

I Yが言うと「そうね…勝てないわね」とバツサリ

「H Y先輩！それを言ったらおしまいですよ！」

T YがH Yの言葉に笑って応じる。

「…だったら、今度の定休日に准尉に手合わせをお願いしようか？」

とH Yが提案すると、一同「「さんせい」」と言った。

翌日早朝、まだ日が昇っていない時間に、H Gがトレーナー姿で縁側から庭に降りると、

「准尉、おはようございます」

と言つて、H YとT Y、I Aが玄関から出てくる。

「おう、おはよう…あれ？」

とH Gが言つたので、H Yが振り向くとI YとM Pが居た。

「…珍しいな、お前ら（I Y、M P）が早起きするなんて」

「いや、H Y先輩が、准尉が毎日トレーニングをしているというので、ご一緒させていただこうかと思ひまして…」

「構わんぞ」

と言つて、H G達は軽く柔軟体操を済ましてから、母屋を出て港に向かってジョギングを始めた。

ジョギングから帰つて、足腰の整理柔軟をしてから、T Y、I Aは木刀での素振りを初め、H GとH Yは筋トレを初める。I YとM PはH G達を見様見まねで筋トレをする。

それが一通り終わると、H Yは朝食の当番なので母屋に入る。H GはI Aに指導をする。

I Y、M Pは手持無沙汰になり、組手の型を練習する。

その内、母屋の縁側でH Yが「准尉、風呂先にいただきました」と言うとH Gが「うむ」と言つて、母屋に上がり風呂に浸かる。

H Gが風呂から上がると「お前ら風呂空いたぞ」と言うので、T Y達が風呂に入る。

風呂場でI Yが

「あのメニューを毎日…？」

とT Yに訊ねると、

「そうね…よっぽどの事がないと、ほぼ毎日」

「よっぽどって？」

「台風とか大雨・大雪とか、仕事で都合がつかないときとか…」

「なるほど…でも、道着とか着て体術とかのトレーニングはしないのですか？」

「准尉が道着を着た事は…わたしが知っているのは、会社に居た頃位かな？逆にあんた達は見た事ないの？」

「私は無いですね…私が入社した頃は白兵戦のコーチは別の人でしたし、准尉には射撃と銃器の取扱い、爆発物の取扱い訓練と作戦等の戦術の講義を教わっただけです」

「そうね…以前B S A Tの訓練（「巻き込まれ親父の狙撃」参照）の時もそんなこと話したけど、入社年度によつて違うみたいね…わたしの頃も、准尉は射撃と銃器の取扱い、爆発物の取扱い訓練と作戦等の戦術の講義が主で、白兵戦系は、別の人で准尉は居てもコーチの補佐はI T先輩だし…あつ、H Y先輩も居たか…射撃と銃器の取扱いの訓練には准尉の補助にT Tさんも居たつけ…H Y先輩の時は、全部准尉にしごかれたつて言つてたな…」

「そう言う事では、H Y先輩羨ましいな…」

「…だから、今でもH Y先輩は准尉にベツタリ…」

と言つて、T Yが指さすとI YとI Aが応じて指さして

「「それ当たってますね」」

「ぶえつくション…」

H Gが食卓で大きくしゃみをした。

「准尉、どうしました？」

給仕するH Yが訊ねる。

「なに…多分、お前さん以外の娘どもだろう…」

「そうかもしれませんね…」

H Yはクスクスと笑つて返事をした。

「H Y、お前…朝のトレーニングにI YとM Pが参加した理由知つてたな…」

「はい…」

「教えろ！」

「はい、実は…准尉が歳の割に俊敏に動けるので、あの子達（I Y、M P）が不思議がつて…」

「ほーお…『歳の割に』は余計だが…」

「なら、今度のお店（白山亭）の休みの日に准尉に手合わせをお願いしようかと、わたしが言いました」

「なーる」

「で、受けていただけますか？」

「いいだろう…」

「はい、皆にそう伝えます」

白山亭の定休日…港町警察署の道場にH GとH Yを始めとする碇屋エージェントの一同と、何故かT Tが居た。

「T T…お前は？」

とH Gが言うと

「あら、私は見物ですわ…碇屋最凶…じゃなくて、頂点を決める勝負と聞きましたから、一見の価値がある見物ですので、いの一番に駆けつけました…フッフ」

と言って、T Tが笑った。

道着に着替えたH G。それを見て

「なんか、いつもと少し違うような…」

とI Yが言うと、H Yは

「あの姿を見るのは何年ぶりかしら（普段は、H Y達と同じ道着を着ています）…別に体術

でも組手でも問題ないけど…」

「H Y先輩は知っているんですね」

「そうね…私が准尉のあの道着を初めて見たのは、入社（前にH G達が居た民兵会社D K）した時の白兵戦の訓練だったわねえ…」

「あの道着の流儀知っているのですか？」

「そうね…なんでも准尉の実家に伝わる古武術の流派と聞いた事あるわ」

H G達は道場で軽く柔軟体操をすると、H Gは道場の中央に立ち、

「誰から始める…一斉にかかられると俺が困る」

「デハ、ワタシカラネ」

と言って、M Pが指の関節を鳴らして道場の中央に出てくる。道場は、滅多に見られない子弟対決とあって、練習している人達は道場の隅に行き見学していた。また審判は道場の師範が行う事になった。

「碓屋異種格闘戦…勝負は相手が“まいった”と言うまで…それでは、初め！」

M PがH Gに向かって、長いリーチを生かした突きと蹴りを繰り出す。それを見ていたI

Yは、

「あれで、私は追い詰められたのよね…」

と言った。しかし、H GはM Pの巨体の体重を掛けた攻撃を悉く受けては弾く。その内、M Pの繰り出した蹴りの足を掴み、それを引っ張り、バランスを崩して倒れたM Pに馬乗りになり、M Pの顔面に突きを繰り出して寸止めする。

「マイッタ！」

とM Pが言うと、

「それまで！」

H GはM Pの上からどいて、M Pの手を取って引き起こす。M Pは息が上がっていたが、H Gは平然としたまま…

「イヤー、シャツチョサン強いネ」

とM Pが言った。

「んじゃ、次！」

H Gが言うど、「ではわたしが…」と言つてH Yが応じる

「初め！」

審判が言うと同時にH YがH Gの懐に飛び込む、それを見たM P

「ワタシ、あれで投げられたネ」

と言うど、H YはH Gの道着の襟を掴んで投げの体勢に入る…普通の人ならば、これでH Yの背負い投げが決まるのであるが、H Yが投げようとしても、H Gが微動だにしない…その後何度かその体勢でH Yが投げを打つが、状況は変わらず…見ている人は皆不思議に思つた。H Yが再度投げを撃つタイミングで、H GがH Yの袖を掴み、H Yの足を払うど、H Yは無造作に畳に転がった。

「???」

自分が転がされた状況を理解できないH Y…H GがH Yの袖を掴んだまま締め技に入ろうとしたので

「まいりました！」

と、降参した。

「それまで！」

「なんだ…もう降参か…このまま締め技を回避できないと悟ったか…」

と言つて、H GはH Yの手を取つて起こすと。

「准尉…わたしは准尉の締め技を回避する術をあの時（H Yが入社してから受けた白兵戦訓練でH Gに締め技で何度もおとされた経験があります。作者注）以来、未だに知りません」と言つて、H Yは苦笑いをした。

「次！」

H Gが言うと、I Yが「准尉、お願いします」と言つて、H Gの居る道場の中央に進む。

「初め！」

審判の声が掛かると同時に、I YはH Gの懐に入る。

「（准尉は、前の二人で息が上がっているはずだから、短期決戦ではなくて、長引かせれば勝機はある…）」

とI Yは考え、突きや蹴りを繰り出すが、H Gは冷静にそれを見切っていた。

H Gがわずかなスキをつくつたので、I Yは「（今だ！）」と得意の踵落としを見舞うべく足を上げたところ…その上がった足をH Gに手で払われ、同時に反対側の足をH Gの足で掃われる。バランスを崩して倒れたI Yの腕をすかさず掴み、そのまま締め技に持つていく…

「うわー、えげつない…」

とH Yが言った。締め技の体勢が決まったH Gが「うるへー、こいつ（I Y）が“まいつた”と言わないからだ」とH Yに言い返す余裕を見せるH G。I YがH Gの足を叩く…

「それまで！」

と言う審判の声に、H Gは締め技からI Yを開放する。I Yは咳をしながら

「まいりました！」

と言った。

「次は、T Yだな！」

とH Gは言った。T Yは「お願いします！」と言って、棒を構える。H Gは木刀で構える。

「T Y先輩はどう挑むのだろう…」

と、I Yは見ていた。

気合と共に、T YがH Gに打ち込む：H Gは木刀でかわし、後ろに下がる：

「やっぱり、T Y先輩の棒には押されるか…」

I YはT Yの棒と対決した時の事を思い出していた。

T Yの繰り出す棒の攻撃に下がりながら木刀でかわすH G：一見押されている様だが、

H Gは体術で言う場外に出ないで、円を描くように巧みにかわし続けている。

「（…准尉は、わざとT Y先輩の攻撃を受けている？）」とI Yが思ったその時、H Gの反撃が始まった。H Gの木刀が横にそれ、H Gがわざと隙を作ると、T Yがチャンスとばかりに大きく振りかぶった。H GはT Yの振りかぶった隙に間合いを詰めて、下から木刀を切り上げてT Yの横っ腹を打ちそこで止めた。

H Gが真剣を持っていたら、胴体が横に両断されているであろう…とT Yは負けを認め「まいりました」

と言ったので、審判は「そこまで！」と言った。

H Gは息が上がっていたが、I Aを見据え

「最後はI Aだな」

と木刀を持ったまま鬼気迫る迫力で言うと、I Aは

「まいりました」

と言ったので、審判は「不戦勝…」

その後のシューティングレンジでの射撃も、H Gの独り勝ち…結果、碓屋異種格闘戦は、H Gの勝ちで終わる。

母屋に帰り、風呂に浸かりながら反省会…

「やっぱり、准尉には敵わないわ…」

とH Yが言うと、一同

「「うんうん…」」

「あれだけやって（勝負して）、勝ち続けるなんて…やっぱり准尉は強いや」とT Yが言う。

「ワタシ、H Gと初めて試合したけど、H G強いネ」

M PもT Yに同調する。

「じゅ…准尉は化け物ですう…」

I Aが言うと、皆頷く。

「私も、勝てませんでした…でも、H Y先輩が投げを打った時、なんで准尉は投げられなかったのでしょうか…」

と、冷静にH YとH Gの勝負を見ていたI Yが訊ねる。H Yは

「…それが、不思議なのよね…投げを打っても、准尉は動かないし…なんか、立ち木相手に投げを打っているような…」

「あつ、それ、私も感じました」

とI Yが言う。

…その疑問は、すぐに解明した。

翌日、男屋のガンスミス工場で、

「ようお嬢、昨日、H Gの奴と格闘技で試合したんだってな」

S KがI Yに問いかける

「はい」

「…結果は？」

「はい、私を始め、皆さん負けました…」

「ガハハハッ…だろうな」

「軍曹（S K）は、准尉の強さをしっているのですか？」

「うーん、俺もあまり知らんが、あいつ（H G）母方の家に代々伝わる古武道を受け継いでいると言うのは聞いた事あるね」

やはり、そうですか…」

「なかでも、足技は凄いらしい…」

「そうなんですか？」

「それから、あいつは裸足になると凄いだ…うーん、上手く言えんが、まるで、足が手の様に…」

「足が手の様に？」

「う、うん…足の指が手の指の様に器用なんだ…奴は」

「…?…?」

「畳を足の指で掴んで投げ技をかわしたり、相手の手を足で払うときに、相手の袖を足の指で掴んだり、投げを打つときは相手の裾を足で掴んで逃げられない様にしたり…足癖が悪くてね…昔、あの野郎…足で銃を撃ったことがあったな…」

と言って、S Kは笑った。それを聞いて、I YはH YがH Gを投げられなかった理由を知っ

た。

I Yは、その事をH Y初め他の人に話をしたら、

「それでも、わたしは准尉には敵わないわ」

とH Yが言うと、

「そんな足技があっても、あの時の勝負では出なくて負けたし…」

とT Yが言う。

「ワタシとの勝負も、H Gそんな技出さなかったネ」

とM Pも言う。

「ハハハ、元より准尉には勝てません」

とI A。それを聞いたI Y

「そうですね…あの足技を使ったのはH Y先輩の時だけですし…やはり准尉には敵いませ
んね」

「『『そーだね』』」

と、一同一致した。

「巻き込まれ親父の困惑 Ⅱ完Ⅱ」